戦姫絶唱シンフォギア～装者と光の戦士たち～

BLACKRX

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は決して相見える事の無かった…光の戦士と装者達の物語である…

戦姫絶唱シンフォギアとウルトラマンのクロスオーバーです。

共に記憶は薄いですが、一生懸命頑張って書きます‼？

感想待ってます。

２０１５／０９／０４　追記　情報情報を修正しました。

２０１５／０９／２４　追記　タグを編集しました

２０１５／０９／２７　少し休載をします。

２０１９／０１／０８　再開した報告するの忘れてやした、申し訳ないです。

目次

プロローグ
プロローグ（あらすじ）―――――――――――――――1
プロローグ2・光の戦士との出会い―――――――――――3
覚醒の絆―ネクサス編―
始動―ネクスト―――――――――――――――――――7
覚醒―ネクサス―――――――――――――――――――13
慈愛の戦士と大地の巨人―コスモスとガイア編―
光との再開と地上からの使者―――――――――――――18
慈愛の戦士と大地の巨人―――――――――――――――25
第1章（無印）始まりの歌
撃槍の少女と絆の戦士―――――――――――――――30
番外編　1―――――――――――――――――――38
防人の剣―――――――――――――――――――41
特異災害起動部二課にて…―――――――――――――46
赤の力ージュネッスー―――――――――――――――52
蘇る古代の巨人―――――――――――――――――58
巨人たち…―――――――――――――――――――64
脅威！カオスウルトラマン！―――――――――――――70
宇宙から来た戦士…―――――――――――――――77
激突！コスモス対カオスウルトラマン―――――――――83
幼き日の約束―――――――――――――――――88
究極のカオスウルトラマン誕生……その名はノイズ―――95
囚われのネクサス、決戦！ルナアタック！―――――――101
絆の奇跡と未来の福音―――――――――――――――108

プロローグ

プロローグ（あらすじ）

特異災害ノイズそして同じ分類に入る怪獣…有史以来人類から存在する忌むべき存在、だが怪獣に関しては様々な防衛チームが存在し対処していた…

怪獣保護を目的としたＴＥＡＭＥＹＥＳ…

怪獣の調査などを目的とした、ＧＵＴＳ…

そして怪獣退治のエキスパートでとても黒い噂がある組織ナイトレイダー…

今まで現れた怪獣、侵略宇宙人のデータを元に怪獣、侵略宇宙人退治のエキスパートの集まりで、科特隊からＵＧＭの防衛チームの後継組織である防衛隊、ＧＵＹＳ…

など様々な防衛チームが組織され様々なチーム同士にイザコザやら共闘やらいろいろ起こっているが怪獣と戦っている…

しかし、ノイズに関しては防衛チームの持つ超科学では対処出来ていなかった…唯、一つの組織を除いて…

とある町…そこには不思議な鎧を纏い戦って特異災害ノイズと戦っている少女達がいた。

「行くぞ！翼！」

「分かった！奏！」

一人の少女は槍を、もう一人の少女は剣を携えノイズを斬り伏せる、二人の少女達が纏っているのはシンフォギアと呼ばれるものだ…

シンフォギア…それは聖遺物の欠片から作られた鎧型武装でありこの地球上で唯一ノイズに対抗できる存在でもある…だが怪獣戦に関しては対怪獣用戦闘機には劣る…

だが、この地球に防衛チームでもシンフォギアでも守れない脅威が近づいて来ているとは誰も思っていなかった…

その予兆を感じたのはアルケミー・スターズと呼ばれる天才達のチームがある波長を感じたことが始まりだった…

その波長は宇宙から来ている事が分かり解析が始まった、そして解析が終わった時、それは地球を滅ぼす為に人類に対しての通信だった事が分かった。

同時刻…もう一つはＧＵＴＳが落ちた隕石の調査の時にその隕石は一億五千万年前の地球の地表で覆われていて分解し調べたところ、中はタイムカプセルになっていてそのタイムカプセルから人型のホログラムがでてきた、そのホログラムはユザレと名乗りＧＵＴＳのメンバーにこれから災害が起きると伝えられた。

それから数ヶ月…ＧＵＹＳ日本支部、ＧＵＹＳ・ＪＡＰＡＮが宇宙から地球に向かう生物を確認し、迎撃に向かったが一機を残し全て全滅した…その生物は地上に降りて街を強襲した…その宇宙生物は国防軍の戦車隊、戦闘機、爆撃機隊の攻撃を喰らってもビクともせず、街を蹂躙し続けた…

数時間後…その生物は満足したがの如く街から飛び去って行った街は決定的打撃を受け死者が多数現れた、同時刻…ツヴァイウィングのライブ開催中にノイズが現れ大混乱に陥った、その事件は死者は１２８７４人に登る大惨事となった。

この物語は決して相見える事の無かった、装者と光の戦士の物語である。

追記

尚、この世界はウルトラマンからウルトラマン８０が地球に訪れて地球を守っていたが、５０年近く来てないので時代と共に忘れ去られてしまった。

プロローグ２・光の戦士との出会い

二年前、ツヴァイウィングライブ会場控え…
そこには二人の少女と一人の男子がいた…
「ライブ、楽しみにしているからな…翼、奏」
彼の名前は風鳴大吾（かぜなりだいご）…ＧＵＴＳ所属で非公式でツヴァイウィングの天羽奏（あもうかなで）と付き合っていてる男だ…年齢は１９と若くしてＧＵＴＳ隊員になれたとあって結構優秀である、また、ダイゴにはある秘密があった…それは数週間前、とある遺跡探索の任務の最中に古代怪獣ゴルザ、古代翼竜メルバか遺跡を襲撃し、その遺跡にあった２つの巨人像を壊し最後の一体を壊そうとした時、ダイゴがガッツウィング（当時のガッツウィングは非武装）に乗りゴルザ、メルバに立ち向かったがガッツウィングが被弾し墜落しようとした時に光に救われ、ウルトラマンティガとなりゴルザ、メルバに立ち向かい勝利を収めたのである、ユザレからはその事は秘密にせよと言われ今までみんなに言わずに隠している…
「おう、任せろ！ダイゴ！」
そう答えたのは恋人である天羽奏（あもうかなで）がそう答えた。
「が、頑張ります…お兄様…」
そして、彼の事をお兄様と呼んだ少女の名は風鳴翼（かざなりつばさ）ダイゴの妹で１６歳である。
「それじゃ、二人とも頑張って俺は警護の任務があるから…あっ！それと奏！」
「ん、なんだよ？」
「このライブが終わったらさ、飯食いに行かないか？」
「おお、いいぜ！行こう」
「それじゃ、また後で！いつものところでまってるからな！」
そう言ってダイゴは二人の元を離れ警備の任務に就いた…
ダイゴが警備任務についた後、二人も動き出した…
「行くぞ、翼！」
「分かった、奏…」

二人も為すべき事を為すために、ライブへと向かうのであった…
そして同時刻、別の場所で…一人の少年がある機械を頭につけ眠っていた…その機械の名は夢を見る装置（略して夢見）で夢を見るためだけに作られた物である…
その少年はその機械を使ってある夢を見ていた…それは赤い巨人と巨大な竜が戦っている夢である、そして赤い巨人が光線を放ちその巨人な竜を倒した。
その後…体は巨人の方へながれ〝彼〟の元へたどり着く…
「君は…ウルトラマン…？」
そう言って少年は何か話しかけようとしたが急に夢見が不具合を起こし壊れたと同時にその少年は目を覚ました、たも同時にさっきまで覚えていた夢の内容を忘れていた。
「はぁ…また…失敗かぁ…」
その少年…高山大地（以下ダイチ）は壊れた夢見の所に言ってガラス棒みたいな記憶媒体を取り出し調べたが、どんな夢を見ているのかは分からなかった、だがその実験から二年後…運命の出会いを呼ぶ事も知らずに…
数年前…ファースト・コンタクトと呼ばれる宇宙人と接触する事件があった。
その時、その子供の名は春日井武蔵（以下ムサシ）…彼はある宇宙人とある約束した。
「【真の勇者】を目指せ…ムサシ」
「真の勇者？…」
まだ子供のムサシには分からなかった為聞き返したが、だがその子は…心で気付いていた。
「うん！なるよ！【真の勇者】に僕はなるよ!!？コスモス！」
その子はそう〝彼〟と約束した…彼は頷き去って行った。
ピピピ…ピピピ…
それはその少年の夢だった…
「ん…夢か、久しぶりに見たな」
そう言って彼は…ムサシは起き上がり首に掛けてある青い石を見

ていた…
「そういえば…あれからもう数年かぁ…」
あれから数年が経ちムサシは立派になりもうすぐ高校一年生になろうとしていた。
しかしムサシは知らなかった、もうすぐ、〝彼〟に再会することを…
時と場所を二年前のライブ会場に戻す…そこには一人の少年が友達と一緒にツヴァイウィングのライブを楽しんでいた…だが今は地獄絵図と化していた…何故ならノイズが現れ人々は我先にも逃げようとしていて出口が見つからなかったからだ、そこで少年…真木一樹（まきかずき…以下カズキ）は友達…姫矢蓮（ひめやれん…以下レン）の手を引っ張りある所へ向かった。
そこは配管工だった、カズキは以前ここに来た時に迷子になった事がある、その理由はここから外に出て親と逸れた事が原因である、その時に家のあると思われる方向に歩いて滑り落ちて川に落ちて溺れた記憶がある…
その時、カズキは諦めかけていた…だが一つの声がカズキを救った…
【諦めるな!!?・!!?・】
そう言われたカズキは死に物狂いで泳ぎ、岸までたどり着いた…その後警察に保護され無事に両親と出会った。
その声は今となっては分からない…だがその一言でカズキは変わったのだ…勇気のある少年へとそして人の命を助ける仕事をすると。
その後、カズキはレンと共に配管工を通り外へ脱出した、と同時にある歌がライブ会場の方向から聞こえてきたのだった…
数分前…ライブ会場ではシンフォギアを纏った奏が一人の少女に駆け寄っていた。
その少女の目は虚で胸から血を出していた、その少女を見た奏は…
「おい!・死ぬな!・目を開けてくれ!・生きる事を諦めるな!・」
彼女はつい叫んでいた…その少女は彼女を虚な目で見つめていた。

「なぁ、見ててくれよな…私の最後の歌をな…」
奏は目が虚な少女にそう言った後、ノイズの大群の前に立ちはだかった…
(ごめんな…ダイゴ、約束は守れそうにない、せめて私以外の誰かと一緒に添い遂げてくれ…)
そして奏は…シンフォギアの持つ最大の力…【絶唱】を歌った。
「止めて!奏ーーー!」
他のノイズと戦っていた翼は奏を止めようとしたがもう遅かった、彼女は文字通りの最後の歌を歌いノイズを全滅させた筈だった…しかしノイズを全滅した後、またノイズが現れ目が虚な少女と奏に向かってノイズが向かっていた、翼は剣わ携え二人を守る為に立ち塞がる…
「来い!ここから先は行かせない!」
しかしノイズは翼に興味が無いのか後ろにいる奏や少女に向かって攻撃を始めた、翼は来たやつを片っぱしから斬るが数が多く守りきれない…だが翼は諦めてはいなかった
「うぉぉぉぉ!ここからは一歩も!」
しかし、その想いとは裏腹にノイズの一体が翼を突破し目が虚な少女に向かったが突然ノイズが灰になっていた。
「一体に何が?」
ふと翼は地面に影がある事に気が付いた、そして上を見上げる…そこから光線がノイズに向かって放たれノイズを全滅させた、そしてある光を奏に浴びせその影は遠くへ飛び去っていった…
「あれは…なんだ…」
翼はアレがなんなのか疑問に思ったがスグに奏の元に駆け付けた。
この事件の後、奏は絶唱を使った代償なのか全身の機能が麻痺していた為、最低でも二年ちょっとの入院が必要だと言われた…
そして…この事件はこれから行われる脅威の前触れである事を知らずに…
次回…始動―ザ・ネクスト―

覚醒の絆―ネクサス編―
始動―ネクスト―

あの事件から数ヶ月後…

一人の少年が友人と共に学校へ向かっていた、その少年は数ヶ月前、ツヴァイウィングのライブがあった会場にいた真木一樹だった、カズキはあの後学校以外の周りの人から…人殺しとか、金泥棒とか言われまくっていたが学校の友達は俺の事をいつも通りに接してくれて助かっている、レンも同様な事を言われたが全くアイツは気にせず学校のみんなと喋っている…

だが、カズキにとってはクラスメイトと担任の先生以外の生徒からは嫌な目で見られ、先生も人殺しめという目で見てくる…それに対しレンは学校から生き残って良かったとか、これからも頑張れとか言われてカズキとは正反対の扱いを受けていた。

そんな日が続いたある日…カズキはレンと一緒に帰っていた、最近カズキはレンの傷の跡がサッカー以外で出来ていることに気が付いていた（場所は近くの河川敷である）。

「なぁ、レン…」

「ん、どうした？カズキ」

「その傷…サッカーの傷じゃないよな？」

カズキは意を決してレンに質問してみた、レンはニコリと笑ってこう答えた。

「ああ、そうだよ…この傷は…」

「見つけたぞ！〝ウルトラマン〟」

レンが答えようとした時、後ろから黒ずくめの男が現れ、レンの言葉を遮った。

「今日が貴様の最後の時だ‼？」

そう言って黒ずくめの男は暗殺宇宙人ナックル星人に姿を変え、レンを襲ってきた…

「やめろ‼？」

カズキはレンの前に立ちナックル星人に立ち向かおうとするが…
「邪魔だぁ!!?」
「ぐぁ!」
ナックルに殴られ吹っ飛ばされるカズキは河川に転がり、地面に頭が当たり気絶していた…そしてナックル星人の拳がレンに届こうとした時、レンの体が発光し光がやむと姿が変化していた…
ウルトラマン・ザ・ネクスト…それがこのウルトラマンの名前であり、ある日レンが手に入れた力である。
ネクストはナックル星人の攻撃を躱し蹴りを入れて遠くへ吹っ飛ばした、しかし…ナックル星人はある意味驚いた顔をしていた。
「貴様は〝ティガ〟ではないのか」
そう狙った相手を間違えていたのだ…彼はあるウルトラマンの変身者を狙っていたのだが、波長がそれと似ていた為、間違えてネクストの変身者、レンを狙ったのである…
それを聞いたネクストは…
「ティガ?違う…俺は!!?ウルトラマン…ウルトラマン・ザ・ネクストだ!!?デァ!!?」
ナックル星人に対しそう答え(この声はカズキには聞こえてない)、ナックルに向かって飛び蹴りを放った。
「ぐ!!?」
ナックル星人はその飛び蹴りを喰らい、川に入った…
すると、大地が揺れ川の中から一体の怪獣が現れた、その怪獣の名前は用心棒怪獣ブラックキングである。
「ハッハッハッ!やってしまえ!!?」
「グガァァァァ!!?」
ブラックキングの肩に乗ったナックル星人の号令と共にブラックキングが人間サイズのウルトラマン・ザ・ネクストを踏み潰そうとした、だが…
「ジュワ!」
ネクストは掛け声と同時に大きくなりブラックキングと同等の大きさになった…

ウルトラマン・ザ・ネクスト・ジュネッス…ネクストが進化した姿で戦闘能力が向上している

そして、戦いが始まった…最初はお互いに睨んでいたが先に動いたのはネクストだった、ネクストはブラックキングに蹴りを入れるがブラックキングはまるで蚊に刺された程度にしか思っておらず、逆に殴り返してきた。

「ハァ!」

ネクストはそれを躱し蹴り、手刀、パンチを入れるがブラックキングは怯む程度にしか感じていない…それもその筈、このブラックキングはティガパワータイプのパワーに耐えられるように強化されている、その為〝本来〟の力を出し切ってないネクストでは勝ち目は低い…

「ジェア!」

だがネクストは諦めずに攻撃を繰り返すが…

「ハッハッハッ!その程度か!大口を叩いた割には弱いなウルトラマン…ブラックキング!本気を出せ!」

「ギヤァォォォン!!?」

ナックル星人の号令と共にブラックキングは反撃して来た、ネクストはそれをさっきみたいに躱そうとするが…

「デェア!!?」

攻撃を喰らい地面に伏してしまう…

(さっきよりもスピードが速い…だけど!)

「シェア!!?」

ブラックキングが倒れたネクストを踏もうとした時、ネクストは地面を転がって躱しハンドスプリングの要領で立ち上がった…

その頃カズキは目を覚ましネクストとブラックキングが戦っている光景を見ていた…

だがカズキには分かっていた、このままではネクスト…レンが負けるとカズキは周りを見渡す…そこには何故か拳銃に似た何かが置かれていた、カズキは迷うことなくその銃に似た何かを手にしブラックキングに向けて撃った、それは閃光弾だった…

ブラックキングとナックル星人はその光を直で見た為か…
「ウギャャャ‼?」
「キシャャャ‼?」
二体は悲鳴をあげその場で立ち止まってしまった、このチャンスをネクストは見逃す筈もなく、ネクストは両腕を斜めに伸ばしエネルギーを貯め伸ばした腕をクロスさせネクスト最大の必殺技の【エボルレイシュトローム】をブラックキングに向かって放った、ナックル星人はそれに気づきブラックキングの肩の上から飛び降り、ブラックキングは【エボルレイシュトローム】が直撃し青白い光がブラックキングの体を包んだ後、爆発せずに粒子となって消滅した。
消滅を確認したネクストはカズキを見てうなづき空を飛んで去って行った…
カズキはそのウルトラマンを遠くに行くまでジッと見つめていた。
暫くして対怪獣部隊ナイトレイダーが来てカズキに少し質問したが、カズキはそれに適当に答え解放された…そしてカズキはあのウルトラマンがつい最近現れた第三のウルトラマンだと知った。
その後、カズキはレンがいると思われる場所に向かって歩いた。
とある公園…そこには傷だらけのレンが座ってカズキが来るのを待っていた、そして…
「レン…やっぱりお前なのか…あのウルトラマンは…」
「そうだよ、カズキ…それと覚えているか、この場所…」
「ああ、覚えているよ…来るのは【あの日】以来だな」
カズキはそう言った後、レンの隣に座った。
暫く、沈黙が続いた…それを破ったのはレンだった。
「聞きたいことがあるんじゃないのか?」
それを聞いたカズキは…
「いや、別に聞きたいことはない…」
と答えた、その後カズキとレンは昔の思い出話をしていた、例えば当時一緒に遊んだ事や一時見知らぬ女の子たちと鬼ごっこの事や、初恋の話など…カズキは顔を真っ赤にして否定したが、それを見たレンが笑うなど楽しい時間だった…だが、無粋な邪魔ものが入ってきた。

「見つけたぞ！〝ウルトラマン〟‼？」
「‼？」
　後ろから聞き覚えのある声を聞いて振り返ると、さっきレン（ネクスト）が倒した筈のナックル星人がいた。
「今度は俺自ら相手をしてやる！」
「カズキ…下がって…うぐ⁉？」
　レンはカズキを庇うように前に立つが突然の痛みに苦しみだす。
「な、なんで‼？今更‼？」
「レン‼？」
　カズキはレンが倒れたところ見て駆け寄った、するとレンが血を流しているのが見えた。
「まさか…レン！」
　カズキはその血を見て気付いた、レンが病気を患っている事を…
「だい…じょ…ぶ…ガハァ⁉？」
　レンは大丈夫と言おうとしたがまた口から血を吹き倒れたがレンの顔に赤い紋章みたいな物が浮かび上がったがすぐに消えてしまった、それを見たナックル星人は…
「どうやら、さっきの戦闘で限界がきたようだな…ならば死ね‼？憎き〝ウルトラマン〟‼？」
　光線銃を構えレンに向かって撃った…だがそれはレンに当たる事はなかった…何故ならカズキが庇ったからだ…
「ウグゥ‼？」
　光線はカズキの心臓を貫いた…本来なら彼は倒れる筈だった…だが彼は立っていた、その目に諦めのない魂が込められていた。
「‼？」
　それを見たナックル星人は少しだけ怯えていた。
（な、何故だ？何故…何故俺がこんな奴に…虫の息の筈なのに…何故、怯えている‼？）
　ナックル星人は再度銃を構え撃つがカズキは少しも動きもせず、光線の攻撃をレンから庇い続ける…
　レンはその光景を見てこう思っていた…

（やっぱ…お前がなるべきなんだよな…ウルトラマンに…ネクスト…俺ではなく彼に取り付いてくれ、そしてアイツを救ってくれないか？）

と同時にレンは心の中にいる人物にそう言う…

（分かった…今までありがとうレン、君に会えて良かった…）

と心の中にいる人物はそう答えた後、レンの中から消えていた。

（ありがとう、ネクスト…俺もお前に会えて良かった…）

レンもそう答え気絶した。

「クソォォォォ‼？」

バンバンバンバン‼？

ナックル星人はずっと撃ち続けるがカズキは一歩と動かない、死んだ筈なのにも関わらず彼は動かない…

しかし、ナックル星人は恐怖に駆られて見ていなかった、カズキの中に一筋の光が入り混むところを…

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ…

ｎｅｘｔ…覚醒―ネクサス―

覚醒―ネクサス―

赤い空間の中に一人の少年…いやカズキがいた。
「うん…ここは？」
カズキは目を覚まし周りを見渡した、何も無くただ赤い空間が広がっているだけだった…
「目を覚ましたか…少年…」
「‼？」
カズキは突然何もない空間から誰かに話しかけられたので驚いて周りを見渡した。
「今、私は君の目の前にいる…」
カズキはそう言われて目の前を見た、そこにはさっきまで無かった黒いシルエットが映っていた。
「アンタは…誰だ？」
カズキは黒いシルエットに向かってそう聞いた。
「私の名前は…ノア、訳あって今はこの姿をしている…」
ノア…彼はそう言った後、黒いシルエットが消えてそこには見覚えのある姿があった。
「レンが変身していた、ウルトラマン…」
カズキはその姿を見たとき、レンが変身していたウルトラマンを思い出し、声に出ていた。
それを聞いた、ノアはうなづきこう言った。
「そうだ、私は彼と同化しこの地球に迫る脅威を短い間だっだが迎撃していた…だが、私はこの形態では【ストーンフリューゲル】が使えない、その為彼は体にダメージを残して戦っていた、そのせいで彼の持つ病気を進行させてしまった。」
と言った同時にカズキの頭の中にストーンフリューゲルの映像が浮かんだ。
「どうしてアンタはこの姿で来たんだ？、他の姿なってからここに来るべきだったんじゃないのか？」
カズキは何故、ノアがこの姿で来たのか疑問に思ったので聞いた、

そしてノアはこう言った。
「今すぐにでも追わなければならない相手がいたからだ…いや、追わなければ取り返しのつかない事になっているからだ…」
　カズキはそれを聞いてこう思っていた…
（なんで…そんなに恐れているんだ、まるでそれを待っていたら手遅れになると分かっているかの如く…）
　そう思った後、彼はある事に気付いた。
「てか…なんで俺の中に？」
　カズキはどうしてノアがここにいるのか疑問に思い聞いてみた　、そしてノアはこう答えた。
「気付いて無かったのか？、カズキ…キミは死んだんだ、君の友達を庇ってな…」
「え？」
　カズキはノアに言われた時、その時の事を思い出していた、そしてカズキはある事を考えた。
「じゃあ、頼みたい事がある」
「なんだ？」
「アンタの力を俺に貸して欲しい…　俺がレンの代わりに戦う!!？」
　それを聞いたノアは彼に問いた。
「本当にいいのか？、それがいばらの道で絶望の道だとして君にその覚悟はあるのか？」
「最後まで諦めない…それが俺の道であり、進むべき道なんだ」
　カズキはノアの問にこう答えた、その時のカズキの目は信念が覚悟が宿っていた…と同時にノアは彼から不思議な力を感じた。
（彼は〝光の遺伝子〟の持ち主だった…だが、それでも…）
　ノアはこの力の正体を感じ取ったが自分の〝本来〟の力とは遠いが、力の一部を出せると分かった…
　ノアは手を差し出しこう言った…
「この力をお前に託そう、頼むぞカズキ…」
　カズキも彼の手を取った…
「分かった…任せろノア」

そして赤の空間の崩壊と同時に…彼の手には変身アイテム【エボルトラスター】を握りしめ、そして現実世界へと戻っていった…

そして、現実世界…そこには光線銃をカズキに向かって構えていたナックル星人が落ち着きを取り戻し気絶したレンの所に近づき光線銃を構えていた。

「これで終わり…ブハァ‼?」

撃とうとした時、突然横からパンチを喰らい吹っ飛んでいた、ナックル星人は殴られた方向を見つめるとそこには…

「待たせたな…ナックル星人‼?」

ナックル星人が殺した筈の真木一樹（マキカズキ）だった。

「バカな‼?貴様は俺が殺した筈だ‼?」

ナックル星人は驚き光線銃を構えて撃とうとしたが先にカズキが【ブラストショット】を構えナックル星人の持つ光線銃を破壊した。

「な、なんだその銃は…ええい！こうなったら‼?」

と叫んだと同時にナックル星人は巨大化した、と同時にカズキもエボルトラスターを鞘から抜き空に向かって掲げた、すると彼の体は光に包まれ巨大化した。

その姿はさっきのゴツゴツとした姿とは違って、スマートですっきりとした姿に変わっていた。

ウルトラマンネクサス・アンファンス…ウルトラマン・ザ・ネクスト・ジュネッスから進化した姿でザ・ネクスト・ジュネッスに比べ技の威力と数が増えたが基本能力に変化のない形態である…

それを見たナックル星人は予備のブラックキングを呼び出しネクサスに向かわせた…しかし、さっきと違って今度はブラックキングが押されていた、それを見たナックル星人は…

「バカな‼?対ティガ用に作られた怪獣の筈なのに！何故だ‼?」

恐怖と驚きが混じった悲鳴を上げていた…

（これで決めてやる‼?）

「シェア‼?」

ネクサスはブラックキングを蹴り飛ばした後、腕を十字に組み【クロスレイシュトローム】を放った、クロスレイシュトロームは流れる

用にブラックキングに命中し爆散した、そしてネクサスはナックル星人に向き直った。
　ナックル星人は逃げようとしたが後ろからネクサスの技の一つである【バーティクルフェザー】が命中し倒れた、ネクサスは倒れたナックル星人の両足を掴みジャイアントスイングをして誰もいない所の山に向かって投げた。
「ギャァァァ‼?」
　ナックル星人は山へ衝突した、ナックル星人は悲鳴を上げて立ち上がろうとしたが…
「シェア‼?」
「ガァ⁉?」
　クロスレイシュトロームが命中し爆発した、その後ネクサスは光に包まれ消滅した。
　病室…そこには傷だらけのレンと仲良く話しているカズキがいた、カズキはレンに今までのことを全てを話した。
「そうか…お前がウルトラマンになるとはちょっと意外だったな?」
「そうか?」
「そうだよ。」
「「あはははは‼?」」
　二人は仲良く笑った後、レンは雰囲気を変えて言った。
「一人じゃ限界があるから手伝うよ」
「ああ、ありがとな…レン、これからもよろしくな」
「ああ、親友‼?」
　二人は握手をし決意を固めた。
　二人の紡いだ絆が生んだウルトラマンネクサス…しかし、彼等の運命は常に争いの中にあることを知らない…
　場所が変わってとある場所…その場所はまるで城のような感じでとても素敵な雰囲気を纏うと同時に不気味な雰囲気を感じていた。
　そしてその中ではパソコンをいじっている女性があるウルトラマンをまるでわ恋人もしくは想い人を見つめるように見ていた、そのウルトラマンの名前はネクサス…ウルトラマンネクサス・アンファンス

である。
「まさか…、ここであの方に会えるなんて…」
そう言う彼女の隣には銀髪に近い髪の色でツインテールにしている少女が彼女にある事を聞いた。
「なぁ…フィーネ、どうしてそのウルトラマンを見ているんだ?」
それを聞いた、フィーネと呼ばれる女性はその銀髪の少女をビンタし…こう言った。
「貴女が知る必要はないわクリス、さぁ…早く〝ソロモンの杖〟を起動させなさい…イイわね。」
その時の表情はクリスを怯えさせていた、何故なら今の彼女の表情はとても恐ろしくそして愛憎がはいっていたからだ…
それを見たクリスは何も言えずにうなづきソロモンの杖がある思われる部屋に向かって歩き出した…
フィーネはそれを見届けた後、すぐにでも画面の方に向き直ってこう呟いていた。
「まさか…また貴方様に出会えるとは思っても見ませんでした…すぐにでも貴方様を本当の姿にしたいのですがすみません…もう少し時間を私に下さい、さすればバアル呪詛が解かれ貴方様は真の姿である、ノアに戻すことができます、だから少しだけ待っていて下さいわノア様…」
そう言った後、彼女は笑いに笑っていた…まるで脅威がこれから行われるかの如くに…
覚醒の絆―ネクサス編―ｔｈｅ　ｅｎｄ…
ｎｅｘｔ…始まりの夢―コスモス編―

慈愛の戦士と大地の巨人―コスモスとガイア編―
光との再開と地上からの使者

それは数年前のある日、それは数人の友達と一緒に星を見る約束をしていた時の話だ、その日は台風が直撃して友達はみんな家に帰ってしまって僕一人だけ残ったんだ…

でもその次の日…僕は出会ったたんだ、ウルトラマンに、そして…

ピピピ…ピピピ…

「ん?夢か…」

その少年は電子時計の目覚ましモードで目を覚まし時間を見て血相を変えて着替え、勉強机の上に置いてある青い石を首に掛けた。

「ちょっと!早く起こしてよ!叔母さん!」

そう言って彼は保護者代わりの親戚の叔母さんの妹が経営する店、〝お好み焼き屋フラワー〟（学校が近い為ここに住んでいる）から出発した。

それは初めての地球に友好的な宇宙人ザ・ファースト（通称コスモス）とのファーストコンタクトから数年後…一人の少年が怪獣保護区の一つである鏑木諸島を訪れていた、その少年の名は春日井武蔵（カスガイムサシ）…今年でＳＲＣアストロノーツ養成学校高等部に入学した少年である…

今日、彼が来た目的は友達の友好巨鳥リドリアスに会いに来たからである…

「お!ムサシじゃないか、今日もリドリアスに会いに来たのか?」

とムサシを出迎えたのはＴＥＡＭＥＹＥＳの元隊員の車弁慶（クルマベンケイ）だった。

「はい!そうですよ、ベンケイさん」

とムサシは元気良く挨拶した。

「最近良く来るな、学校は大丈夫なのか?」

「何言っているんですかベンケイさん？今は春休み中ですよ。」
とベンケイはそう言われて後カレンダーを見て春休み中だった事を思い出していた。
「おおっと、そうだったな…じゃ、行くかムサシ」
「はい‼？」
そんな会話をした後、二人はリドリアスの所に向かって歩き出した。
リドリアスがいる所は断崖絶壁の崖の下にある巣だった…そこではリドリアスがムサシが来たと分かったのか上を向いていた。
「あっ！リドリアスーー‼？」
それに気づいたムサシは手を振りながら…
「また会いに来たよー‼？」
「キュエー‼？」
と言ったと同時にリドリアスが鳴き声を出して歓迎してくれていた。
ムサシは〝青い石〟を胸から取り出し、ベンケイにある事を聞いた。
「ベンケイさん、【コアモジュール】を使ってもいいですか？」
それを聞いたベンケイはニコリと笑って…
「使ってもいいが壊すなよ、ムサシ」
「ありがとうございます‼？」
そう言ってムサシはコアモジュールが止めてある飛行場に向かって走って行った…しかし、彼等は気付いてなかった、ある謎の光がリドリアスに入っていくところを…
あれから暫くして、ムサシはコアモジュールを使ってリドリアスと空中遊泳をして遊んでいた、その最中…一機のテックサンダーがこちらに向かってきた。
それを見たムサシは何かあったのかと思いテックサンダーが泊まった場所に向かおうとした時…
「キュエーー‼？」
「‼？、リドリアス‼？」

リドリアスの様子が急におかしくなっていた、まるで別の何かがリドリアスを乗っ取ろうとしている様にそして…
「‼?」
ムサシはリドリアスが変異したのを目撃した、リドリアス（変異体）は真反対の方向に向かって飛び、島の周りに張ってあるネットバリアを突破して市街地へ向かって行った、それを見たムサシはコアモジュールのブースターを蒸しリドリアス（変異体）を追って空に舞った。
その頃、リドリアスが変異する数分前…
ベンケイの部屋にＴＥＡＭＥＹＥＳ所属でテックサンダー一号機のパイロットの吹雪號（フブキゴウ）とＴＥＡＭＥＹＥＳのリーダー神隼人（ジンハヤト）が鏑木諸島に訪れある事を聞いていた。
「久しぶりだな、ベンケイ」
「ああ、久しぶりだなハヤト…ところで何の用だ？」
ちなみにこの２人は同期であり、そこまで険悪の中では無い…
「ベンケイ…此の所怪獣の様子に異常は無いか？」
「？、いや特に異常は無いが…どうした？」
ベンケイはハヤトがこの島の様子を確認しに来た事を何かあったと思い聞こうとした時…
ビビビビ‼?
「「‼?」」
ゴウ、ハヤト、ベンケイはバリアが強制突破された警報を聞き外を見たそこには姿が変わったリドリアスが市街地に飛んでいく様子とそれを追うコアモジュールの姿があった
「キャップ‼?」
「分かっている行くぞゴウ‼?、ベンケイ…訳は後で話す」
そう言ってハヤトとゴウはテックサンダーに乗り、リドリアスとムサシの乗ったコアモジュールを追って空を飛んで行った。
それを見たベンケイは…
「何が起きているんだ、この地球に…」
と呟いていた、その頃…ある高校の研究室である少年達がある実験

をしていた。
　その実験は粒子加速機（夢見の改良型）を用いた、人の意識を粒子加速空間に送る実験である…
　その実験機の中に一人の少年が入っていた、その少年の名は高山大地（タカヤマダイチ）…最年少でアルケミースターズ入りを果たした天才である…
　今、彼は粒子加速実験機を用いてまたあの世界に行ったがその時の記憶が無かったのでそのまま解散し、部活のメンバーと共に帰路についていた。
　途中、公園に寄った彼等は何か食べ物を食べながら話し合っていた。
「なぁ、ダイチ…粒子加速機作ってさ何の意味があるのかな？」
「んー…地球の言葉がわかるとか？、後は未来の自分が何をやっているかとかかな？」
「なぁダイチ、それって作っても意味あるの？」
「そんなこと言うなよ…これでも既に稼動している発明だっていろいろあるんだからな！」
「でも、それって秘密なんだろ？」
「だって秘密は秘密なんだもん…」
　ちなみに今ダイチと会話している彼等もダイチには劣るがなかなかの頭の良さをらもっている（設備は付属大学なの設備を借りている）。
　そんな会話をしている中…ダイチの友達の一人が上を向いて指をさしていた。
「な、なぁ…あれって」
「？」
　みんなは上を向くと、クリスタルみたいな結晶が空に浮いていた、その中には怪獣が入っていた。
「なんだ？あの怪獣は⁉？」
「そんなことより、ダイチは⁉？」
「本当だ！ダイチがいない⁉？」

と仲間が心配して探しているころ（その友達は避難する人達のなだれに巻き込まれた）、ダイチは物陰に隠れてアルケミースターズのダニエルに連絡を入れていた。
「ダニエル…アレがそうなのか？」
「そうだよダイチ、アレが…」
とダニエルが何か言おうとした時…
バサ‼？バサ‼？
「‼？」
上から突然変異を起こした、リドリアス（変異体）が飛来して来た、そしてリドリアスを追うように後ろからムサシが乗るコアモジュールが飛んで来ていた、それを見ていた、ダイチは…
「あれも、破滅招来体が読んだのか…」
ダイチがそう呟いた後、六機の戦闘機がリドリアス（変異体）を攻撃を始めていた、ダイチには見覚えがあった…
「ファイター‼？、完成してたんだ‼？」
六機のファイターが現れたと同時にクリスタルが砕け散り中から宇宙戦闘獣コッヴが姿を現した。
ファイターのパイロット達はそれを見てコッヴとリドリアス（変異体）に対して攻撃を始めていた。
だが…ムサシの乗るコアモジュールはリドリアス（変異体）を守るように機体を動かし妨害していた。
「邪魔をするな‼？民間機‼？」
赤いファイターのパイロットの一人がムサシに向かって怒鳴りながら通信していた。
「リドリアスを攻撃しないでくれ‼？」
ムサシはファイターのパイロットに向かってそう訴えたが…
「各機！コアモジュールは無視して攻撃を再開しろ‼？」
青いファイターに乗るパイロットはそう命令を出し、攻撃を再開した、それを見たムサシは…
「やめろーーーー‼？」
リドリアスを庇うように前にでる…ファイターは攻撃出来ずその

まま下がる、ムサシは青い石のペンダントを胸ポケットから取り出し振り回した、美しい風切り音が聞こえてきた、別のファイター隊と戦っていたゴッヴもその音を聞き攻撃するのをやめていた。
リドリアス（変異体）の姿が変わって元の姿に戻り、コアモジュールを追って空を飛ぶ、コアモジュールもリドリアスを鏑木諸島に誘導するよう飛行する、だが…
「お前達！何をやっている！攻撃しろ‼？」
青いファイターに乗るパイロットが攻撃指示を出し攻撃を始め、リドリアスに命中した。
その攻撃のせいでリドリアスは再び変異体へ姿が代わりファイターへ再び引き返しリドリアス（変異体）はファイターを一機落とした。
それを見ていたダイチは…
「ダメだよ！そんな使い方じゃ‼？」
と叫んでいた、そしてムサシも…
「やめてくれ！リドリアス！」
と言ってリドリアスの方に向かった、その頃ダイチはエリアルベースに連絡しリパルサーシフトの事を伝えた後、公園の真ん中に
「そんな…僕達は間に合わなかったのか、このまま人類は…どうしたらいいんだーー‼？」
とダイチが叫んだ時、突然時が止まった感覚を覚え周りを見回した後、突然地面にぽっかりと穴が開きその中へ入っていき、一人の巨人と再開した。
「ウルトラマン…君の力を貸して欲しいんだ！」
ダイチは巨人に頼み戦って貰うよう頼んだが、彼はダイチに指を指した。
「僕が…戦うの？」
巨人はうなづき、彼を自分の中に招き入れた。
「暖かい…この光が…」
とダイチは巨人と一体化し、地上へ出ていた…
ダイチと同時刻…ムサシはリドリアスを止める為にもう一度、青い

石がついたペンダントを回していたがリドリアスの攻撃を喰らい地上に墜落していた。
「どうしたら…どうしたら、リドリアスを救えるんだ…」
ムサシは青い石を見て、昔あった巨人の事を思い出していた。
「そうだ、頑張らなくちゃ…待っててリドリアス‼?」
そう言った後、青い石が光っていた。
「もしかして…君なのか!」
そう言った後、彼は懐かしい光に包まれ青い巨人になっていた、と同時にテックサンダーが追いついていた。
「キャップ‼?」
「ああ、間違いない…〝ザ・ファースト〟…いやウルトラマンコスモスだ。」
そう、ムサシは光の巨人になっていた、その巨人の名は…ウルトラマンコスモスと…

次回…再来の戦士と大地の巨人

慈愛の戦士と大地の巨人

上空のとある空域そこにはとある飛行要塞があった、その要塞の名はエリアルベース…それは新しく設立されたナイトレイダーと対になる対怪獣攻撃組織である

「た、大変です！、市街にザ・ファーストの存在が確認されました、それにもう一つの反応もザ・ファーストに似たエネルギー反応に似ています！」

そのエリアルベースでは一人の女性オペレーターが基地司令と参謀にそう報告していた。

「ザ・ファースト…数年前に現れた青い巨人…」

基地司令、山野純一郎（ヤマノジュンイチロウ）はザ・ファースト…ウルトラマンコスモスを見て何かを思い出すようにつぶやいた。

「今になって、どうして現れたんだ…」

「多分ですが…この地球に根本的破滅招来体以外の脅威が迫っているという事でしょう…」

参謀の千葉（チバ）にジュンイチロウは彼に目を向きそう答え再び画面を見つめていた。

その画面にはリドリアス（変異体）と向かい合うコスモスとすぐ横でゴッヴと戦うウルトラマンガイアの姿があった。

それとは別の場所で…銀髪に近い白髪でツインテールの少女がその光景を見ていた。

「コスモス…私は…」

そう呟いて彼女は歩いてその場を離れていった…その少女の瞳には涙が浮き出ていた。

そしてコスモスは通常形態であるルナモードでリドリアス（変異体）と戦っていた。

「シェア‼？」

「キュエ⁉？⁉？」

というよりリドリアス（変異体）からの攻撃をいなしていた、リドリアス（変異体）が爪で切り裂こうと腕を振り下ろすがコスモスはそ

れを手で弾き後ろに回る、リドリアス（変異体）は後ろに回った所を尻尾で攻撃したが…
「エイヤ！」
「キュエ？」
　コスモスは華麗にそれを躱して距離を取り、リドリアス（変異体）に【ルナエキストラクト】を放ちリドリアスに取り付いた異形な物だけを切り離し消滅させた後、リドリアスに球状のバリアを張り、リドリアスに鏑木諸島に戻るように伝え、リドリアスが飛び去った後コスモスはガイアと戦っているゴッヴの元へと向かった…
　コスモスがリドリアス（変異体）を元に戻す1分前…
　ガイアはゴッヴ相手に苦戦していた、何故ならガイアの変身者である高山大地は元々科学者であり、体力的にコスモスと同化したムサシや一般の人達に比べたら体力、身体能力が劣る為、ダイチはガイア本来の力を出し切ってなかった為苦戦していた。
「ディア‼？」
「クュエーー‼？」
　だがそれでもガイアはチョップや蹴り、殴るなどをして抵抗していた…効いてはいるのだがどれも決定打になっていなかった。
「グェェ‼？」
「デァァァ⁉？」
　ガイアはゴッヴの反撃を受け近くのビルにぶつかり穴を開けてしまう…と同時にコスモスが背後からゴッヴに飛び付き蹴りをする要領でゴッヴの背中を蹴って空中で一回転しゴッヴと向き合う…
「ハァァ」
「グェェ‼？」
　ゴッヴはコスモスに向かって突進するがコスモスはそれを手を使っていなし後方に回った、ゴッヴは後ろに振り向きコスモスに向かってツノから光弾を出すが…コスモスはバックステップし距離を置いてゴッヴが放つ光弾を手で弾きながらゴッヴの方へ進む…
（な、なんて動きなんだ…どうやったらあれほどの動きが出来るんだ…）

それを見ていたダイチは驚きの声を上げていた、何故ならその動きは、彼が脳内で考えている理想的な動きだったからだ。
「ハァァ…」
コスモスは光弾をすべて弾きゴッヴに【フルムーンレクト】を放った、その光はゴッヴを包み込んでいた。
「やった!!?ザ・ファーストが奴を…」
青いファイターのパイロットやエリアルベースの職員、ガイアはコスモスがあの生物ゴッヴを倒したと思っていた…だが、光が消えるとそこにはゴッヴが無傷のまま立っていた。

それを見たファイターとガイアは攻撃しようとしたが、突然青いファイターに通信が入り、攻撃の中止命令が出された為攻撃出来ず、ガイアの前にはテックサンダーが目の前でホバリングして待機し動きを抑制していた。
コスモスはそれを見た後、ゴッヴに向かって歩き優しくそして動物の様に可愛がっていた…そしてコスモスはゴッヴにリドリアスと同じバリアを張った後、ゴッヴを鏑木諸島まで運ぶ為に飛び去った。
ガイアはある事を考えていた…
(どうしてあのウルトラマンはあの怪獣を殺さなかったんだ、あの怪獣は根本的破滅招来体の尖兵の筈なのに…)
と…しかし、ガイアは知らないあの怪獣は破滅招来体によって連れて行かれた事(誘拐された事)を…
それから数日後…鏑木諸島に新しい仲間が増えていた、その仲間は外宇宙(このゴッヴは以前コスモスに助けられた怪獣だったらしい)から来たゴッヴである。
あれからすっかり落ち着き(コスモス曰く環境の変化や攻撃された事による混乱らしい)リドリアスやゴモラなどの鏑木諸島に住んでいる怪獣と遊んでいた。
「元気になって良かったな…ゴッヴ」
それをムサシは遠くから見つめていた、今回ムサシがここに来た理由はある人に呼ばれていたからだ…

「遅れて済まなかった…春日井武蔵（カスガイムサシ）君、いや〝流武蔵（ナガレムサシ）〟君」
そう呼ばれてムサシは後ろを振り向いた、そこいたのは顔に傷がある一人の男性だった。
「あなたは？」
ムサシは自分を呼んだ人がどんな人物なのか訪ねた。
「ＴＥＡＭＥＹＥＳのリーダーの神隼人（ジンハヤト）だ、君の〝本当〟のお父さん…流竜馬（ナガレリョウマ）とはＴＥＡＭＥＹＥＳ設立前の国防軍時代の戦友だったであり友だった。」
「そうなんですか？」
ムサシはそれを聞いた時、ほんとうなのかなと思い聞いてみた。
「ああ、そうだ奴は凄かった…」
そのあとハヤトはムサシにリョウマの様々な事を聞かせていた、その中でもリョウマは怪獣とどんな事をしたら仲良くなれるのかなと相談していた事をあかした。
「さて、昔話はそれぐらいにして本題に入ろう…ムサシ君、君があのウルトラマンなんだろ？」
「!!？…どうしてそれを？」
ムサシはどうして正体がばれたのか気になった、そしたら意外な答えが出てきた。
「動きを見れば大体わかるんでな、いい動きだった。」
ハヤトはムサシの頭に手を置き褒めた。
「あ、ありがとうございます。」
「そこでだ、一つ相談があるんだ…ＴＥＡＭＥＹＥＳに入らないか？」
ムサシはそれを聞いた時、驚いていた…
「ぼ、僕がですか？」
「ああ、君がウルトラマンとして行動する時に役立つと思うからの提案だ…どうかな？」
「も、勿論入れてください」
ハヤトからの提案にムサシは了承した、こうしてムサシはＴＥＡＭＥＹＥＳの一員となったのであった…これが後々ムサシにとって自

分の成長に繋がるとは知らずに…
　同じ頃…ダイチはあの後、新しく設立された対怪獣組織ＸＩＧ（シグ）の隊員となっていた、そこでダイチはザ・ファースト事、ウルトラマンコスモスの戦闘データを見ていた。
「どうして…あのウルトラマンは破滅招来体の尖兵を逃したんだろ…うーん…」
　あれから何故コスモスが怪獣を守る事が気になっていたが取り敢えずウルトラマンとしてＸＩＧ（シグ）隊員として頑張る事を誓ったのであった。

　ガイア、コスモス…相対する二つの思想、その違いが後々ある出来事に繋がる事になる事を誰も知らない…

次回…撃槍ガングニールと絆の戦士
少女は出会う…絆の戦士〝ネクサス〟と幼い頃に遊んだ友達と…
少年は出会う…初恋であり撃槍の意思を継ぎし少女と…
この出会いは偶然か必然か…だが少なくともこの出会いは偶然では無いという事は確かだという事だ…

第1章（無印）　始まりの歌
撃槍の少女と絆の戦士

二年前（ツヴァイウィングのライブ後）、ルルイエ海域…
それはザ・セカンド…ウルトラマンティガがルルイエの〝邪神ガタノゾーア〟と戦っていた。
「デュア!!?」
「グァァァァーーーーン!!?」
しかし…ティガは負けていた、どんなに力を振り絞ってもガタノゾーアはそのティガを圧倒していた。
「フゥゥゥ…ハァ!」
ティガはガタノゾーアから距離を取り赤、紫、銀のマルチタイプから紫一色のスカイタイプに姿を変え空を飛んだ。
「ハァァァ!ディア!」
ティガはエネルギーを貯めランバルト光弾を数発放った、全てガタノゾーアに命中したが奴は無傷だった。
「フゥゥゥ…ハァ!」
それを見たティガは紫一色のスカイタイプから赤一色のパワータイプに姿を変え空中からの急降下を生かした飛び蹴りを喰らわせようとしたが…
「グァァァァン!!?」
「ティア!?」
ガタノゾーアはその直前に黒い霧…【シャドウミスト】を出しティガの飛び蹴りを防ぎ、ティガにダメージを与えた。
「グァァァ!!?」
ティガは尚も立ち上がり手にエネルギーを貯め【デラシウム光流】を放つが…
「グァァァァン!!?」
ガタノゾーアは蚊に刺された程度にしか感じてないらしく、吠えていた。

「ハァァァァ!!?・ディア!!?・」
ティガはエネルギーをデラシウム光流より強力な光線【ゼペリオン光線】（パワータイプ版）を放った。
「グァァァァン!!?・」
流石にこれは聞いたらしく少しだけ怯んだが…大してダメージを与えられていなかった。
「…!!?・」
それを見たティガ（カラータイマーはなっている）が驚いていたが、すぐにファイティングポーズを取りガタノゾーアに向かおうとしたがガタノゾーアによる触手の拘束により動けなくなる…
「デュアー・ディアー・」
パワータイプの力を最大限生かして解こうとするが中々解けない…すでにゼペリオン光線（パワータイプ版）を撃った時にエネルギーを使いすぎていたからだ。
「グァァァァン!!?・」
そしてガタノゾーアは口から石化光線を放ちティガを石化させた。
だが…ティガは世界中の子供達の光の力を借りて蘇った。
その力は子供達の光を得る前のティガを圧倒した、ガタノゾーアを圧倒し…そしてティガは【グリッターゼペリオン光線】を放ち、ガタノゾーアを倒し世界に平和を取り戻した。
それ以来ザ・セカンド…ウルトラマンティガは現れていない…
それから二年…世界中の脅威はまだ終わってはいなかった。
カオスヘッダーの脅威、根本的破滅招来体の襲来、ノイズの脅威…様々な脅威が地球を襲ったが彼等は無事にそれらの脅威と戦い、カオスヘッダーと和解し、残る敵は根本的破滅招来体とノイズのみとなっていた。
しかし…まだ地球の脅威は終わることは無かった、コレがまだ地球の脅威の序章である事を知らないまま…

とある夢の中…

ある公園…そこには一人の女の子が一人の男の子に話しかけていた。
「ねぇ、どうしてないているの？」
その男の子は泣いていた。
「へ？、どうしてって…それはね、あのこたちにたいせつなものをうばわれたんだ…」
その男の子はジャングルジムに登っている少年達に指を指して答えた、理由を聞いた少女は…
「そうなんだ！わたしにまかせて！」
と言って自分より年上の人達に向かっていった、その男の子は止めようとしたが…既に女の子はその少年達に立ち向かい、無事に男の子の大切な物を取り返していた。
「ありがとう…えっと…」
その男の子はその女の子の名前を言おうとしたが…分からずに考えていると…
「そのまえにじこしょうかいしよ！」
女の子がそう提案してきたので男の子はそううなづいて自分のなまえを言った。
「ぼくのなまえは…」
男の子がそう答えたあと、女の子が…
「つぎはわたしのばんだね、わたしは……」
その女の子が自分の名前を言おうとした時に…
ジリリリン！ジリリリン！
「うるさい‼？」
夢を見ていた少年はグーパンで目覚まし時計を殴り壊して起きた。
「あの夢かぁ…久しぶりに見たな…」
その夢を見ていた少年の名は真木一樹（マキカズキ）…1年前に親友の姫矢蓮（ヒメヤレン）からウルトラマンを預かりある敵の情報を集めながら怪獣と戦っている。
「今何時…あっ…」
カズキは朝起きて時計を見た時…眠気が一気に冷め、急いでご飯を

食べ家を出発した。
何故彼が急いで出発したのか、その理由は学校に遅刻しそうだからである、しかも今日はこれから通う高校の朝礼がある為急いでいた。
「チクショー‼?レンの奴、先に行くとは‼?」
カズキは取り敢えずショートカットする為に塀を登り塀から塀を飛び越えて学校が見える大通りに出た。
「よし‼?間に合うかも‼?」
と思って急いでいたら…
ドン‼?
「うわ！／きゃあ！」
人にぶつかってしまった、カズキは直ぐに立ち上がりその人に手を伸ばす。
「すみません、大丈夫ですか?」
「そちらこそ大丈夫ですか?」
カズキはその人の顔を見るとカズキと同じくらいの年の女の人だった、しかも…
(小さい時の〝あの子〟に似ている…)
「?、どうかしましたか?」
「いえ、なんでもないです。」
どうやらカズキは彼女の事をさっき見た夢の中の女の子そっくりだった為見ていたらしい…
「じゃ、これで…」
そう言ってカズキは走ってその場を去って行った…
「ん…これって?」
しかし、彼は大事な物を落としていた…それは幼い頃にその女の子から貰った大切な物を…
「…?」
そう少女は渡そうと思ったが、既にいなくなっていた。
「取り敢えず、警察に届けた方がいいよね…えっ‼?」
その少女は携帯（スマホ）を取り出して時間を見た後、走ってある彼女が通う学校へと走るのであった。

カズキが通う学校は私立星天高校と呼ばれる高校で、そこは私立なのに学費が安く、周りからの評価が高く評判である。
「ハァハァハァ…」
カズキはギリギリ間に合い、朝礼を無事に終わらせ…レンに対して怒っていた。
「おい！レン！てめー‼？」
「ははは！悪かったな、あまりに気持ちよく眠っている気配がしたから起こさなかったよ」
レンは全く謝罪の心を込めずに言った…
その後は普通に学校生活を送っていた、その日常風景をご覧あれ…
今日の授業…一時間目　美術
バァァァァァン‼？バァァァァァン‼？
「いいかテメーラ！芸術は爆発だ‼？」
「先生！授業中に火薬は…‼？」
バァァァァァン‼？バァァァァァン‼？
「聞こえねーぞ！なんて言った？」
二、三時間目　体育…
「今日はＣＱＣの授業だ…」
「ＢＯＳＳ！今日はサッカーじゃ…」
「違う！ＣＱＣだ！」
「ＹＥＳ‼？ＢＯＳＳ‼？」
「ここは…軍事学校なのか？」
四時間目　音楽
余りの歌声に記憶障害を起こし誰も起きてない…
昼休み…校庭で不良達による、抗争が勃発‼？しかし、教師陣が乱入して、不良全員が警察送り及び病院送り（なお教師陣が乱入してから発砲音が聞こえたのは気のせいだ。）…
五時間目　理科
「オメーら帰れ…」
「いや！授業しろよ！」

六時間目　数学
「ここはこう解いて…」
「……普通だな」
「そうだな…」
　コレがカズキの通う学校の一日だ…
「どこが普通だ‼?どこが‼?」
「カズキ…お前、誰に言っているんだ?」
　とレポートを書いているレンは何処かの誰かに突っ込んでいるカズキを見てそう言った。
「レン…レポートはいつ終わるんだ?」
「当分先だ…少なくとも午後の6時までいるつもりだ…」
「今日はネクサス以外の〝ウルトラマン〟についての情報を集めるんじゃなかったけ?」
「すまないな…先に行っててくれ、後で合流する」
「必ず来いよ!」
　そう言ってカズキは教室を出て行った…それを見ていたレンは…
「あっ!しまった…アイツに伝え忘れてた、なんか不穏な空気があるから注意しろって…まぁ、いいか」
　レンはそう言った後レポートを書く事を再開した、レン自身自覚は無いが予感が的中するのだ、必ず…
　その頃、カズキは学校を出て図書館に向かって歩いていた…
「確か…街の図書館はコッチの方向だったよな」
　そう言ってカズキは曲がり角を曲がろうとした時…カズキは違和感を感じていた…
(どうして…人が俺以外誰もいないんだ?)
　そう、本来なら賑やかな筈の大通りから全く人の気配を感じ取れなかった。
　カズキはいつの間にか懐から【ブラストショット】を取り出し構えて曲がり角を曲がってそこにブラストショットを構えていた。
「おいおい…冗談じゃないよな…」
　曲がり角を曲がった先には大量のノイズがゴロゴロといた、カズキ

はエボルトラスターの引き鉄を引き弾丸を放ちながら走る、それに当たったノイズの何体かは炭化して消滅するが…カズキを狙ってノイズが攻撃をしてくる。
「はっ！」
カズキは伏せてそれを躱して路地裏に向かって走っていた、途中…
「おねえちゃん！」
と人の声が聞こえたのでカズキはそちらに向かって走り出す、そして声のした方向に行くと今朝ぶつかった少女と女の子がノイズから逃げている光景だった。
「‼？」
カズキはその方向にいるノイズに向かってブラストショットを向けて発砲する。
少女と女の子に向かっているノイズの何体かは倒した後、カズキは少女の元へと走る。
「大丈夫？」
「はい！大丈夫です！って貴方は今朝の…」
「話している場合じゃない、その子は俺が背負うから走れ！」
「はい！」
そう言ってカズキは今朝ぶつかった少女と女の子と共に逃げ始めた。
それからしばらくして…彼等は工場地帯にある、高い建物の作業用の梯子を登り３人は屋上に来ていた。
少女の方は荒く息をあげ寝そべっていた。
「ねぇ…死んじゃうの？」
女の子はと不安な声を出していた…それを見たカズキはその子の頭に手を置いた。
「大丈夫だ！お兄ちゃんとお姉ちゃんがいるからな‼？」
「そうだよ、だから心配しないで」
とカズキの言葉に便乗して少女もそう言った、女の子も笑顔になったが、カズキの顔が険しくそして懐からブラストショットを取り出し少女が見ている視線の方向に構えていた、少女も女の子を庇うように

抱き込む。
（やるしかないか…）
カズキは変身しようと懐からネクサスへの変身アイテム【エボルトラスター】を取り出そうとした時…
「生きるのを諦めないで‼?」
少女が女の子に励ますために言ったと同時に光が彼女を包み、歌を口ずさんでいた。
「うぉぉぉぉ!」
と同時にカズキも叫びエボルトラスターを鞘から引き抜き彼も【ウルトラマンネクサス】（等身大）に変身した。
少女もいつの間にか装甲を身に纏っていた。
「シェア‼?」
「え?えぇぇぇぇ‼?」
今、この場所に二つの異なる声が響いていた。

次回…防人の剣

番外編　1

数年前…Ｆ．Ｉ．Ｓ研究施設

そこには一人の少女が顔から血を流していた、その少女の名はセレナ…セレナ・カデンツァヴナ・イブ、その少女は大切な人たちを守るために歌を歌い…崩壊した建物の瓦礫が上から降って来た瓦礫によって死んだ筈だった…だが…

「シュア‼?」

その時、赤と青と銀色で頭部に二本のトサカ?のある目付きの悪い巨人に助けられた…そして彼女はシンフォギアが存在しない世界へと連れて来られる事となった。

彼女を助けた者の名はウルティメイトフォースゼロ（ＵＦＺ）のリーダーであり今は彼女と同化しているウルトラマンゼロである。

そして彼女の生活は平穏で斬新なものばかりで、彼女の心を満たしていた…

ロボットの整備（主にジャンボットやジャンナイン）

ミラーナイトのストーカーの手伝い（その後ゼロによって粛清された。）

グレンファイヤーの武勇伝（主に炎の海賊達とＵＦＺでの彼の活躍?など）

ウルトラマンゼロと共にＭ７８星雲の光の国に行ってウルトラマンゼロの父親ウルトラセブン（人間体・モロボシ・ダン）とゼロの師匠のウルトラマンレオ（人間体・おおとりげん）に会ったりなど（その時のウルトラセブンが暴走して「レオ!遂に息子に花が‼?」「落ち着いてください!隊長!」と二人とも混乱していて口調が変になっていた。）

彼女自身に春がきていた相手は別の人だった…

「こんにちは、また来たよセレナ‼?」

「ナオ!また来てくれたの?」

「もちろん!」

そう、セレナは同年代である時（【ウルトラマンゼロＴＨＥ・ＭＯＶ

ＩＥベリアル銀河帝国】の時）にジャンボットを操縦していた少年ナオと仲良くなっていた。
「聞いてくれよ！今日さ兄貴が…」
「そんなことがあったんだ、それは面白いね…」
　この二人は周りから見ると仲の良い恋人もしくは兄妹に見えていた、あれから６年の月日が流れ、幸せな時間は終わり戦いの時間が始まることを告げる鐘がなる…
「行くよ！ゼロ！」
「おう！」
　ゼロは追う宇宙を壊す者を、セレナは再会する歌姫となった姉と…
　続きは戦姫絶唱シンフォギア～装者と光の戦士達～第２章をお楽しみに待っててて下さい

ーーーーーーーーーーー☆

「アハハハハハ‼？」
　廃墟になった街で笑い声が響く、その笑い声の主の視線の先には錬金術士キャロル・マールス・ディーンハイムと崩れたチフォージュ・シャトーの残骸、シンフォギア（イグナイトモジュール）を纏った響、クリス、翼の三人の戦士達だった…
「き、貴様！何者だ！」
　キャロルは怯えていた、何故なら鉄壁の守りを誇るチフォージュ・シャトーが〝一撃〟で崩れ落ち尚且、見覚えのある姿があったからだ…
「私が何者か…その質問には、これで答えてあげるよ」
　嘲笑っていた者は地面に突き刺している〝槍〟を拾い上げ、付けている仮面を外した…その顔は
「わ、私…」
「立花がもう一人だと！」

「どうなってやがる⁉？」
　彼女は各々の反応を見た後…
「んじゃ…行くよ…」
　黒い槍を持つ少女…立花響（以下黒響）は彼女達に向かって行った、まず、彼女が向かったのは父との命題を妨害されたキャロルだった。
「キサマーー！」
　キャロルは発狂しながらも絶唱と同等の威力を持つ攻撃を黒響に向かって放つ…だが…
「なんだ…錬金術と聞いて期待してたらこの程度なんだ…」
　黒響は誰も聞こえ無い声でそう言うとアームドギアである槍を使わずに素手でそれを何もない方向いや、タスクフォースＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇの仮設司令基地である潜水艦へと弾き返した。
「「⁉？⁉？」」
　それを見た奏者達も彼女へと向かって行くが…全て素手で裁かれる…
「なんだ…この程度なんだ、つまらない…つまらないなぁ⁉？」
　そう黒響が叫んだ後、後ろへ下りあるものを取り出す。
「もういいや…消えちゃえ」
　それはある者への変身アイテムだった…そして彼女は変身し、そして…世界を滅ぼした。
「次は何処へ向かえばいい？うんうん、わかった…じゃあね」
　彼女は思念波を受け違う世界へ旅立つ…その世界へと…
　番外編１　終わり

防人の剣

「シェア‼?」
「え?えええええ‼?」
　ここはとある工業地のある高い工場の建物の屋上…そこにはウルトラマンネクサス・アンファンスと謎の鎧を纏った少女の姿があった。
「シェア‼?」
　スパン‼?
　ネクサスは迷う事なくノイズへ向かって【アームドネクサス】を繰り出し何体か殴って消滅させる、少女は担いだ女の子を背よったままジャンプしてノイズの攻撃を避けたが、その近くをノイズが近づいていた
「シュア‼?」
　それを見たネクサスは空を飛び上空から【バーティクルフェザー】を数発放ちそれらを数体倒した。
「す、すごい…」
　それを見ていた響は少し驚いていた…何故ならノイズに触れられるということだけでも凄いのにそれどころかノイズを圧倒しているからだ(しかも響もこの女の子もその姿を見てかっこいいと思っている)。
「シェア!」
　ネクサスはさらに両腕に力を込め、ブラックキングに放った【クロスレイシュトローム】を巨大なノイズに放とうとした時…
　ブォォォン!
　一台のバイクが巨大なノイズに突っ込んだ、と同時に…
「〜〜♪」
　歌が聞こえてきた…その歌はまるで人や国を守る為にある〝剣〟だと思わせるかのように…
「何を惚けている!死ぬわよ!貴方はその場でその子を守ってなさい‼?」

あの少女と同じような鎧を纏った女性はあの少女に向かってそう言った後、しなやかかつ素早い動きでノイズを斬り倒した。
その動きはまるで踊っているかのごとく…そしてそのままノイズを全て倒した後…〝ネクサス〟に斬りかかってきた、それを見たネクサスはバーティクルフェザーの応用した技で【シュトロームソード】の劣化版の【バーティクルブレード】を取り出しその女性の攻撃を防ぐ…しかし、彼女は想像以上の速さでそのバーティクルブレードを弾きそのまま斬りに掛かったが…
「シェア！」
ネクサスは彼女がバーティクルブレードに気を取られているうちにアームドネクサスを繰り出したが…
「はぁ‼？」
「ファ⁉？」
彼女はそれを躱し一旦着地した後、ジャンプした後、【蒼ノ一閃】を放つ、ネクサスはバーティクルフェザーを放ちそれを相殺し、地面に着地する…
チャキ…
彼女はまた刀をネクサスへ向ける…
「フゥ…」
ネクサスも又構えを取り応戦する構えを取る、しかし…ネクサスはある考えをしていた。
（どうして…彼女は俺を襲って来るんだわまるで俺が敵みたいな感じになっているような…しかも、感じた事のある波動を感じる…いや、考えるのは後にしよう）
「シェア！」
ネクサスは考えるのを止め、彼女に向かって行った…
「シェア！」
「くっ☒」
ネクサスの怒涛の連続攻撃を前にその女性は防ぐ事で手一杯になっていた、それもそうだ何故ならカズキは父親からの趣味で様々武術を習わさせた（ちなみにカズキ自身も楽しんでいた為、レベルは小

学４年から始めて１年で裏大会に出てる大人達を相手に勝てる程だ…今では父親と親友のレン（体調が万全）しか戦う相手がいないぐらいである）為、一度攻めに入ったら止まる事を知らないぐらいである…

「なめるなぁ‼？」

「シェア！」

「ぐぶ‼？」

ネクサスは振られた剣を弾くと同時に彼女に対して蹴りを入れて彼女を吹っ飛ばした。

「フゥ…ハァァァァ！」

ネクサスは両腕に力を込め【クロスレイシュトローム】を放つ態勢になろうとするが…

「シェア⁉？」

ネクサスは動けなかった、何故なら背後の影に小刀が刺さっているからだ…【影縫い】、それは相手の動きを止める技である、あの時にネクサスに蹴りを入れられた時に投げ影に刺さったのだ、それに気付かないネクサスは動けずにいたそして…

「貰ったぞ！」

「‼？」

声が聞こえネクサスが上を向くとそこには既に蒼ノ一閃を放っている彼女がいた。

ネクサスは避ける事が出来ずに直撃する、だが…

「シェア‼？」

そこには無傷のネクサスが足に赤い炎を纏って飛び蹴り…【ネクサスキック（アンファンス・ｖｅｒ）】（ウルトラ十勇士の時にダークメフィストに放った技）を彼女にお見舞いし、そのままバーティクルブレードを彼女の首筋に当てる。

「くっ‼？」

「…」

ネクサスはバーティクルブレードを消す、それを見た女性は…

「貴様！何のつもりだ！」

ネクサスは何も答えぬまま、空に向かって飛びそのまま空へと消えた。
その後、ネクサスの変身を解いたカズキはあの少女の所へ向かい、いろいろと話をしていた。
そして話している最中にカズキが…
「そういえば名前を言ってなかったな、俺は一樹、真木一樹だ。」
「私は立花響（たちばなひびき）、よろしくねカズキ君」
カズキは立花響と聞いた時、今朝見た夢を思い出していた…
「わたしはひびき、たちばなひびき！」
それを思い出した、カズキは響に聞いてみた。
「なぁ、聞いていいか…小さい頃さ公園で一緒に遊んだ事ないか？」
それを聞いた響は顔を傾げながら思い出していると…
ポン！
と手を叩いた。
「あっ‼？思い出した！あの時泣いてたカズキ君だよね！」
「そうだよ…って、そこかよ‼？」
「だってそれが一番印象に残っているから…」
「ははは！」
この会話したあと二人はまるで思い出を思い出すように話始めた…何故かその空間が甘いピンク色を放っていたのは気のせいか…（ちなみにその二人の会話の隙を見つけようとする女性がいるが話しかけられなでいる）…
それからしばらくして…話が一区切りついたのか一人の女性が話しかけて来た。
「温かいものをどうぞ…」
ちなみに彼女はカズキと響の甘い空間の所為で青筋が浮き出ていた。
「あっ…ありがとうございます」
響はそれを恐る恐るそれを手に取った後、変身が解けて聖リディアン学園の制服になっていた。
「え？」

と同時に響は力が抜けたのかバランスを崩して倒れそうになったが…
「よっと…」
「あっ」
「大丈夫か？響？」
「だ、大丈夫…」
カズキが一瞬で響に近づき彼女みたいに抱き抱えていた、その時響の顔が少しだけ赤くなっていたが…
「ゴホン‼？」
「‼？」
一瞬二人だけの空間になっていたが、独身女性の咳き込みにより、二人はすぐに立て直して謝った。
「すみません」
その後、響はキョロキョロと周りを見渡してさっき響が付けていた鎧と似たようなよろな物を付けていた女性に話し掛けに行っていた。
「あの、そろそろ帰っても…」
カズキは響がその女性の所に行った後、さっき殺気を放った女性に聞いてみると…
ガチャ…
「え？」
いきなり手錠を掛けられた、カズキはつい間抜けな声が出ていた、響も同様に手錠を掛けられ捕まり、そのまま黒服軍団に捕まりそのまま何処かに連行されて行った…
その時のカズキは…
「なんでさーーーーー‼？」
と叫んでいた、これから向かう先でアイツについての情報が得られる事を知らないまま…
次回…特異災害対策機動部にて

特異災害起動部二課にて…

カズキと響はあの後、黒服軍団に捕まり黒い車の中に入れられ何処かに連行されていた、その間…

「俺は無実だ――!ここから出してくれ!」

カズキは車の中で大声を上げていたが、黒服の一人に溝内を殴られ気絶してしまった。

カズキと響が連行されて数十分後…カズキは黒服の男にビンタされて目を覚ました。

カズキはその時、目的地に着いたと考え目を覚ますとそこは学校だった。

「何故、学校?しかもここって…」

カズキはどうして学校に連行されたか分からずにいた、しかもこの学校はカズキに見覚えがあった。

「なんで…学院に…」

そう、ここは響が通う学校である私立リリディアン音楽院だった。

そのあと、響とカズキはエレベーターに乗せられた。

「あの…これは?」

「俺たちを何処に連れて行くつもりですか?」

カズキと響は各々に思ったことを言ったが…

「危ないので、捕まってください」

一人の男性がそう言って言われてカズキは何処かに掴まろうとしたが…その前にエレベーターはきどうした。

「え!ちょ!まっ…グハァ!」

エレベーターは高速で動き出した為、カズキはエレベーターの天井に頭をぶつけそこに大きな穴を開けていた。

「「☒」」

それを見た、三人は驚きの表情をしていたが…特に気にしてなかった。

その間、響は翼と何かを喋っていたが…カズキは何か気になったが、頭が天井から抜けなかった為手錠を力ずくでぶち壊し両腕を使っ

てその天井から頭を抜いた。
「何か話していたので気になったので力尽くで…って、何かあった顔をしてますけど？」
　黒服の男と翼はこれが出来る芸当が一人しかいないと思っていたら、ここにもう一人いるのかという顔をしていた。その後、何処かの部屋に到着したと同時に…
　パン！パン！
「ようこそ！人類最後の砦、特異災害対策起動部二課へ！」
「‼？‼？」
　クラッカーで大歓迎された後、赤い服を来てマジック用のシルクハットを被った一人の男の人に歓迎され横断幕みたいな物に【大歓迎！真木一樹！立花響！】と書かれた物があった。
「あ、アンタは‼？」
　だが、カズキは一人の男性に目を見開いて見た後、大声を出していた。
「弦十郎のおっさん‼？」
「お！カズキ君じゃないか、久しぶりだな」
　そう、彼の名は風鳴弦十郎（かざなりげんじゅうろう）…以前カズキの父親とイザコザがあって喧嘩し、男同士の友情を育んだ中であるらしく、カズキに武術を教えたこともある…
「久しぶりです！まさか…ここで働いているとは思ってもみませんでしたよ！」
　カズキはまさかこんな所で会うとは思っていなかったのか、とても驚いていた。
「ああ、それは私もだよ…」
　ドオオオン！
　とカズキは弦十郎からそれを聞いた後、弦十郎と拳をぶつけあいどでかい衝撃を放ったと同時にカズキに付いていた手錠は木っ端微塵にぶち壊れていた。
　そんな中、響は…
「あの…どうして私達の名前を知っているんですか？」

と一人の白衣を着た女性に質問していたが、それに答えたのは弦十郎だった。
「二課の前身は大戦前の諜報機関から…」
と言おうとした時だった、カズキは手首を捻りながら突っ込みを入れた。
「いやいや、鞄を見ただけだろ！おっさん」
カズキがそう言ったと同時に弦十郎は図星だったのか、少し驚いていた。
「感が鋭いな…まったく」
バシ！バシ！
「これだけは母親譲りですから」
バシィィィィン！
因みに二人はボクサーが練習するようなことをしていながら喋っている、驚異的な身体能力だ…流石にこれには自身を防人と名乗っている翼も真っ青になっていた。
「にしても…強くなったな、何があったんだ？」
バシバシバシバシバシィィィィン！
「まぁ…色々とありまして」
バシィィィィン！
といつの間にか二人は会話を始めていた、その後響は自己紹介をした後、白衣を着た女性…櫻井了子（さくらいりょうこ）に…
「とりあえず、服を脱いで貰おうかしら…」
「え？いわ　や、だから…なんでぇぇぇ？」
「ふふふ…冗談…」
「誰がさせるか！カズキキック！」
ドガァ！
とセクハラ発言されたが、それを聞いたカズキによる飛び蹴りを喰らい気絶した、その後カズキは弦十郎にボコボコにボコされたり色々あったが身体検査を受け、カズキも身体検査を受けたが、特に何も言われなかったのでこのまま帰ることになった。
その帰り道、カズキは響と別れて歩いていたが誰かの視線を感じた

のか、わざと誰もいない路地道に入り背後に振り向くとそこには銀色の鎧を着た同い年ぐらいの少女がいた。
「チッ…気づいていたのか？」
　す銀色の鎧を着た少女が気づかれたのを悟ったのか彼に鞭みたいな物を振り下ろした、カズキはそれを躱しエボルトラスターを取り出そうと考えたが…今回は趣向を変えようと考えエボルトラスターを取り出さなかった、それを見た少女は？マークを浮かべて彼に尋ねた。
「おい！変身しないのか？」
「いや、手を抜いているお前には…これで行こうって決めたからな」
　カズキは少女の質問にそう答えた後、突然身体が赤く発光し姿を変えていた。
「てめえ！その姿はなんだ！」
　そう、その姿は不完全（アンファンス）よりも不　完　全（ザ・ネクスト・ジュネッス）よりも劣るちからであり消耗が最も少ない形態…ザ・ネクスト・アンファンス、この姿では光線技よ使えず、唯一の武器は己の身体能力だけというシンプルな形態である。
「答えないのは私を侮辱しているからか‼？答えろ‼？」
　そう言って少女は鞭で攻撃を仕掛けて来たが、ザ・ネクスト・アンファンスはそれを躱しそのままそれを握り自分に引き寄せた。
「なっ‼？」
　ドガァ！
「グハァ！」
　これは想定外だったのか、少女は驚きの表情と声を出していたが、ザ・ネクスト・アンファンスはそれを物ともせずに殴り飛ばした。
「ぐっ…テメェ…」
「シェア！」
　ドゴォ！
「グハァ！」
　そう言って、少女は立ち上がろうとしたが…ザ・ネクスト・アンファンス一気に詰め寄り殴ったのだ、その後ザ・ネクスト・アンファンス

は反撃する間とないぐらいの連続攻撃を繰り出した、身体能力はアンファンスには劣るもののそれを補い上回るカズキの格闘センスが高いことと、銀色の鎧を着た少女が接近戦が不得意ということが幸いし、翼戦とは違う展開を見せていた。
「シェア！」
ドガァ！
つまり、ザ・ネクスト・アンファンスの一方的な展開…だが…
「シェア！」
「ぐっ…」
ザ・ネクスト・アンファンスが止めを刺そうとした時だった、突然カズキの危険本能がダイレクトに離れと感じて彼はその場を跳躍して離れた、と同時に地面から一人筋肉質で大男が現れたのだった。
「大丈夫か…クリス、後…フィーネが戻れと言っていたぞ」
「分かった…けど余計なお世話だ！ダーラム！」
その大男は銀色の鎧を着た少女をクリスと、クリスと呼ばれた少女はその大男をダーラムと呼ばれた、大男…ダーラムはクリスとそんな会話をした後、クリスは何処かへと散り…その場にダーラムだけが残った。
「貴様は…光の巨人…俺たちの敵…」
ダーラムはザ・ネクスト・アンファンスを睨んだ後、懐からネクサスの変身アイテムに似た道具を取り出し上に掲げたと同時に光がダーラムを覆った。
「シェア⁉？」
光が消えるとそこには黒と赤を貴重とし、ネクサスとら反対の性質をした巨人が立っていた。
「フゥウゥ…」
「シェア！」
それを見たザ・ネクスト・アンファンスは自らに光を纏い、ウルトラマンネクサス・アンファンスとなりダーラムの前に立ちはだかった。
光の巨人（ウルトラマンネクサス）と闇の巨人（ダーラム）…二人の戦いが始まろうとしていた。

to be continue。

赤の力ージュネッスー

特異災害二課では、謎の高エネルギーを検知した為、シンフォギア装者である響と翼を招集していた。
「司令!なにが!」
先に来たのは翼だった、翼はモニターを見るとそこには自分が先程戦った銀色の巨人と〝以前二課を襲った三人の巨人〟の一人である赤い戦士が向き合っていた。
「すみません!なにがあったんでしょうか!」
響は少し遅れながらも司令室に着きモニターを見た時、あの時の巨人がいたのを見てビックリしていた。
「アレは…あの時の…」
響はネクサスの姿を見てとても驚いていたが、弦十郎はそれ以上に驚いていた。
「ザ・フィフスにダーラム、この地球に何が起ころうとしているんだ…」
弦十郎は戦っている光の巨人と闇の巨人を見てそう呟いていた。
弦十郎達、特異災害起動部二課の面々がその二体の戦闘を見ている頃、ネクサス・アンファンスはダーラムのパワーに苦戦していた。
「この程度か?ヌゥゥゥン!」
「シェア!」
ズサァァァ…
ダーラムのパンチは今まで戦った怪獣達よりも強く、一発でも喰らったらまずいとウルトラマンネクサス・アンファンスは本能で悟っていた、しかしかもやられている訳にもいかないのでネクサス・アンファンスはダーラムのパンチに合わせてカウンターキックをお見舞いしたが…
「この程度か?ヌゥゥゥン!」
ドォン!
「ヘェア!」
その蹴りが効かず、逆にダーラムのパンチを喰らい遠くへ吹き飛ば

されてしまい、地に伏してしまう…
「ヌゥウゥン！」
「ヘェア」
ドン！
ダーラムはそれを好機と見たのか、そのまま殴り掛かるがネクサス・アンファンスは横に転がって躱し立ち上がった、その頃ネクサス・アンファンスの中ではカズキがノアにあることを尋ねていた。
「ノア、ヤツに勝つには力を一つ解放する必要がありそうだ」
カズキはダーラムと戦ってなかヤツのパワーに対抗する為には力を解放する必要だと確信していた為、カズキはノアにそう尋ねたがノアはそれを聞いてこう言った。
「それはお前が決めることだ、私は何も言わない」
「分かった、じゃあ…使わせてもらうぜ」
それを聞いたカズキはそう答えた、カズキが〝右腕〟を胸のコアに手を当てると同時にネクサス・アンファンスもまた〝右腕〟を胸のコアに当て、赤い光がネクサスの身体を覆い、それが消えるとネクサスの姿が変わっていた、先程までの銀色の姿とは異なっており身体は赤く、胸のコアにカラータイマーが着いていた、その姿の名は【ウルトラマンネクサス・ジュネッス】…彼の親友、姫矢連が全盛期の頃に変身していた姿である。
「ハァァ…」
それをモニターで見ていた特異災害二課のメンバーは驚いていた、何故ならあの巨人…ザ・フィフスの姿が変わっていたからだ。
「シェア！」
「姿が変わった所で！ヌゥウゥン！」
ダーラムは姿が変わったネクサス・ジュネッスを見て少し驚いていたが、だが…それは彼にとっては〝既に見たことがある〟という光景だったからだ、だが彼は知らないネクサス・ジュネッスの変身が特化では無く総合であることを…だから、ダーラムは何時も通りに殴り掛かった、何故なら赤の姿が自身の同じパワータイプであると勘違いした、だから…

スカ…
「!!?」
「シュア！」
ドゴォ！
「グヌ!!?」
ネクサス・ジュネッスに攻撃を躱されそのままカウンターキックを喰らい怯んだのだ、ネクサス・ジュネッスはその隙を見逃さずにどんどん追撃を仕掛ける。
「シェア！シュア！シェアアア!!?!!?」
ドガ！バキ！ドゴ！ドガ！
「ヌゥゥゥン！調子に乗るなぁぁぁぁぁ！」
ブゥン！スカ…
「シュア！」
ドガ！バキ！ドゴォ！
「グフ…!!?」
ネクサス・ジュネッスに追撃され堪忍袋の尾が切れたのかダーラムは渾身の力を込めて殴ったが…ネクサス・ジュネッスはそれを紙一重で躱し、そのまま連続パンチを繰り出し最後に蹴りを入れ距離を取った。
シャン！シャン！ジリジリジリ!!?
「ハァァァァァ!!?」
シャン！
「シェアアアアア!!?」
ネクサス・ジュネッスはそのままエネルギーを溜め、怯んでいるダーラムにネクサス・ジュネッスの最大の必殺技【オーバーレイシュトローム】を放った。
「うぉぉぉぉ！」
ダーラムはそれに気付いたのか目の前に闇の波動のバリアを張り防いでいたが…オーバーレイシュトロームは勢いを殺さずそのまま貫通しダーラムに命中する。
筈だった…

ドン‼?バァァァァン！
「‼?」
「なっ‼?」
だが…突然目の前に氷の壁が現れオーバーレイシュトロームを防いだのだ。
「この氷は…まさか…」
ダーラムはこの氷に見覚えがあった、と感じた時だった。
「ダーラム…こんなヤツを相手に何をやっているの?」
「そうだぜ…ダーラム、ヒャハハ！」
遠くのビルから声が聞こえネクサス・ジュネッスとダーラムはそちらの方向に振り向くと世紀末ヒャッハーの格好をした男性と不思議な雰囲気を放っているが明らかに別格の雰囲気を放っている女性がいた。
「カミーラにヒュドラ…何の用だ?」
ダーラムは二人に何かを訪ねていると不思議な雰囲気を放った女性がこう答えた。
「【彼】が見つかったのよ、近々フィーネに断って会いに行く予定よ、だからダーラム…あとはアイツに任せてさがるわよ」
と女性がそう言った時だった、突然ダーラムの後ろから巨人が現れた、その巨人はある戦士にいや…ザ・ファーストことウルトラマンコスモスと酷似した巨人…カオスウルトラマンカラミティだった。
「……」
「ふん、分かった…カミーラ、マイフレンドに会いに行こう」
ダーラムはカオスウルトラマンを見た後、人間体になり二人と合流し姿を消したのであった。
「‼?、シュア！」
ネクサス・ジュネッスは後を追おうと空を飛ぼうとしたが…
「ジュア！」
ビュン！
「ヘァ！」
バン！

ネクサス・ジュネッスはカオスウルトラマンの光弾を弾いたものの、既に奴らの消息を追えなくなっていた。
「！」
ネクサス・ジュネッスは光弾を放った方向を見ると既にカオスウルトラマンは姿を消していた。
「……ヘァ！」
ネクサス・ジュネッスは周りを見たあと、空に飛び立ち消えて行った。
ネクサスが戦闘を終えて暫くして…
カズキはレンに電話をしてし今までの経緯を話していた（あとは約束をすっぽかしたことを謝っていた）。
「ネクサスとは正反対の性質を持つ闇の巨人に、装者に、シンフォギア、お前今日は色々とありすぎたな…」
カズキからの話を聞いたレンは少し呆れながらもそう言っていた。
「それなぁ、はぁ…」
「でも、良かったじゃないか…響と再開できて良かったじゃないか」
だが…カズキはそれを聞いても何故か浮かない顔をしていた。
「それはそうかもしれないけどさ…でも、昔会った時とは大分性格が…じゃなかった、心の流れが変わってたよ。」
「心の流れ？どんなところが？」
カズキは人の心を見抜くことに少しだけ長けている、大抵当たることが多かったがノアと融合してからはそれが確実になっていた、カズキはそれを心の流れとよんでいる…
「〝人助け〟が趣味になっている…しかも無償でだ」
「…それは本当か？」
「ああ…響は過去に何かあった、それが影響して彼女は人助けを趣味を通り越して生き甲斐になってる」
カズキの意見を聞いたレンは少し考えごとをした後、こう答えた。
「暫くは彼女のことは様子見だな、何かあったら遅いけど、コッチはコッチで対策を考えておくよ」
それを聞いたカズキは安堵したのかフゥ…と溜息を着いてこう

言った。
「ありがとな、レン…少しは楽になったよ」
その言葉を聞いたレンは安心してこう言った。
「どういたしましてかな…それじゃお休み」
「ああ、お休み…」
カズキは通話を止めて空を見ていてある事を思い出していた、それは数年前のあの日に彼女と出会った時の星空を…
「そういえば、あの時も星空はこんなにも綺麗だったな…」
カズキは誰もいない所でそう呟いた後、うちに帰るべく歩く速度を速めるのであった…
その頃、月面では一体の巨人が地球を見ていた。
「この星に来るのは久しぶりだな…ムサシは元気だろうか」
その巨人の名はウルトラマンコスモス…この星でザ・ファーストと呼ばれている青い巨人だった。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ…

蘇る古代の巨人

ネクサスが闇の巨人とカオスウルトラマンカラミティと交戦して約一ヶ月が過ぎていた。

その間にも色々あった…まず、響の身体には天羽奏が装着していたシンフォギア・ガングニールの破片が心臓部にあったこと…

もう一つは以前、特異災害対策二課は闇の巨人（等身大）と交戦したことがあったということだ、そして…その時の目的はウルトラマンティガの変身者だったことだ、その時に現れたのは三体の巨人で、新たな黒の巨人…カオスウルトラマンカラミティは出ていなかったということだ。

あとは…翼と響の関係が最悪だということだ、その理由はカズキ達が闇の巨人とカオスウルトラマンカラミティに交戦した翌日に起きたことだった、それは響のメディカルチェックを終え、ガングニールなどのシンフォギアの説明があった後のことだった、カズキがブラストショットについて説明しようとした時に、ノイズが現れ翼と響が出撃した時のことだった。

その時の響は翼と一緒に戦いたいと伝えたが、翼は響のことを認められずにいた為こんなことが起きた。

「なら、戦ってみる？私とあなたで…」

「え？」

突然、響は翼に戦いを挑まれライダーキックみたいな技・【天ノ逆鱗】を喰らいそうになったが、弦十郎がそれを拳で防ぎ高い靴がボロボロになったということだ。

それから一ヶ月…二人の歯車は噛み合っておらず、また…翼はカズキとの連携も出来てない、と言っても元々カズキはそもそも響に合わせている為、噛み合わないのは当たり前だが…

「何故？あの子に合わせようとするの？」

「響はまだ、実戦を経験して間も無いんだ…しょうがないことだろう？だから俺たちで支えなくちゃいけないだろ？」

「そんなもの…必要無いわ、だって彼女は戦う覚悟も持ち合わせてい

ないのよ」
「それはお前の勝手な想像だろ?それを決めるのはお前じゃ無い、響だ‼?」
翼とカズキもまた、お互いに相容れない関係だったのか。どんどん日に日に対立していく…
そんな中、一人の少年が街中を歩いていた…その少年の名は春日井武蔵（以下ムサシ）で、高2なっており友人と一緒に街中を歩きながらあることを話していた。
「なぁムサシ!今日は流れ星がよく見えるから何時もの場所に向かおうぜ‼?」
「うん…」
だが、ムサシはあることを考えていた…それは一月前のニュースでカオスウルトラマンが現れた所を見たからだ、しかも…その時に、新たなるウルトラマンを見たこともだ。
「ごめん…今回は一人で見るよ」
ムサシは今回は一緒に見ないと友人に伝えるとその友人は少し驚いた表情をしていた。
「ムサシ…珍しいなぁ、一人で見るなんて」
「そうかな?」
ムサシは友人にそう言われて少し心外だな、と思いながらも聞き直した。
「ああ、意外過ぎてびっくりだぜ…何時もお前なノリノリで返してくるからさぁ」
「そうだっけ?」
「うん、そう…」
「「はははははは!」」
それを聞いたムサシとそう言った友人はお互いに笑い合ったが、ムサシの心の霧は晴れなかった…その後、ムサシは友人と別れた後、ある公園に向かった、その公園は高台にあるせいか余り人は来ていなかった。
「ここに来るのも、半月ぶりかな…」

ムサシはそう呟いた後、下にビニールシートを引いてその上に座って上を見上げた…

「……」

ムサシは空を見上げるとまだ星は見えてなかったが、夕暮れが見せる雲の幻想がとても綺麗で言葉を失っていた、ムサシは少し空を見上げた後、少し仮眠を取るために少し横になったのであった。

その頃、響は一番の親友である小日向未来に電話をしていた。

「ごめん…急な用事が入っちゃった、今晩の流れ星見に行けないかも…」

「ありがとう…ごめんね…」

その内容は今晩流れ星を見に行こうという約束だった、響はガングニールをノイズの群れに向かって行った、カズキもまた別の場所から駅のフォームに入りブラストショットを構えてノイズの群れに撃っていたが、途中から聞こえてきた轟音の方向に行くとそこには、〝顔が黒い〟響がノイズの群れを粉砕していた。

「なんだよ…あれは?」

カズキは何時もと違う響を見て、何時もと違う心の流れが流れていることに気が付いていた。

「……この感じは、まさか…」

カズキはこの気配を以前感じたことがあることを思い出していた、それは半月ほど前にネクサス・アンファンスと交戦したダーラムたちとは違う別の闇の巨人の気配に似ていたからだ。

ドオオオン!

「!!?、しまった!!?今は考え事をしている場合じゃなかった」

カズキは爆発の音で気が付き、響の後を追って行った。

「大丈夫か?響!」

カズキは響に追い付き話しかけたが、響はカズキの言葉を無視してあることを呟いていた。

「流れ星?」

「は?」

その後、響とカズキはジャンプして上にある公園の所に着地して、

響は翼にある事を大きな声で言った。
「私だって守りたいものがあるんです！だから！」
「だから？どうするんだよ？」
「⁉？」「この声は？」
響がそう宣言した時だった、突然違う方向から声が聞こえたのでその方向に振り向くと一月前にカズキが交戦した銀の鎧を装着した少女が立っていた。
「ネフシュタインの鎧？」
翼はその鎧を見て驚きながらそう答えていた、それはその鎧が翼にとって因縁があったからだ。
「あっ…お前はあの時の？」
カズキは同時にエボルトラスターを取り出して空に掲げていた。
「また、ボロクソなやられにきたのか？」
カズキがそう言ったと同時に光に包まれネクサス・アンファンス（等身大）に変身していた。
「え？」
響は突然カズキが変身したのを見て驚いていたが、カズキは以前、響の前で変身したので特に抵抗は無かった。
だが…
「テメェの相手は別のヤツだよ！頼んだぜヒュドラ」
「ヒャヒャヒャ！テメェの相手は俺だァァァァ！」
突然現れた闇の巨人の一人ヒュドラが街中に現れ、住人はパニックに陥っていた。
「シュア！」
それを見たネクサス・アンファンスは等身大から本来の大きさに戻りヒュドラと対峙した、その頃翼と響では…
「翼さん！やめて下さい！相手は同じ人間ですよ⁉？」
「「戦場（いくさば）で何を馬鹿なことを⁉？」」
響の静止を無視して翼はネフシュタインの鎧の少女と戦闘を始めていたらだが…翼はネフシュタインの鎧の少女を前に劣勢だった。
「シェア！セェア！」

フン！フン！
「遅い！遅いぜぇぇぇ！この程度かよ？ヒャッハー！」
ドドドドドドドドドドドドドド‼？
「シェアァァ‼？」
ドン！
その頃、ネクサス・アンファンスではヒュドラを相手に苦戦していた、それは相手のスピードがとても速く攻撃が当てられなかったからだ。
「ハァ…ハァ…ハァ…」
一発一発の攻撃は大したことは無いのだが、これ以上喰らうとヤバイということは分かっていた。
「ヒャヒャヒャ！この程度か？ならこれで終わりだぁぁぁぁぁ！」
ヒュドラがネクサス・アンファンスに止めを刺そうとする同じ頃…翼もまた、ネフシュタインの鎧の少女を相手に奥の手を使おうとしていた。
「月が覗いているうちに決着をつけましょう…」
「う、歌うのか…絶唱を…」
ネフシュタインの鎧の少女は少し怯えていた為逃げようとしていただが…動けずにいた、それはネフシュタインの鎧の少女の陰に小刀が刺さっていたからだ、それは翼が忍者である緒川慎次から教わった技の一つである影縫である、翼は響の方に振り返りこう言った。
「防人の生き様！覚悟を見せてあげ…」
「全く…変わってないなぁ、翼は…」
「‼？」「え？」
翼の言葉を遮るように一人の女性が目の前に着地した。
「え？ど、どうして…ここにいるの？奏…」
「よ！久しぶりだな、翼！それにえーと…」
その女性は翼のパートナーだった少女、天羽奏だった、彼女が到着と同時に止めを刺そうとしたヒュドラに一体の巨人が高速な飛び蹴りを放っていた
「うお！」

それを喰らったヒュドラは地に伏してその方向を見たそこにはある光の戦士がいた。
「テュア！」
その戦士の名はウルトラマンティガ…ザ・セカンドと呼ばれ世界を古の闇の侵攻から人類守った戦士だった。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ…

巨人たち…

大ピンチに陥ったネクサス・アンファンスの前に現れ窮地を救ったのはウルトラマンティガ・スカイタイプだった。
「テュア！」
「き、貴様は‼？どうしてここにいる、ダーラムはどうしたんだ。」
ヒュドラはどうしてここにティガがいる事と〝以前出会った〟時とは違い光を取り戻している事に驚いていた。
「ヒュドラ！俺は貴様らの思い通りにはならない…」
「グァァァァ！」
ヒュュュュン…ドォォォン‼？
とティガが宣言したと時だった真上からダーラムが落ちてきて、赤い巨人が着地しティガと話を始めていた。
「ダイゴさん、貴方は復活したばかりなんです…無茶はしないで下さい」
「分かっているよ、ダイチ…だけど、奴らは力を温存しては勝てない」
「分かりました…けど、無茶はあまりしないようお願いします。」
赤い巨人とティガは少し話した後、二体の巨人に向き直った。
「おい！ダーラム、何負けているんだ！」
「ヌゥゥゥン！」
ダーラムは立ち上がりヒュドラと共にティガ・スカイタイプと赤い巨人に向かっていった。
「ヌゥゥゥン！」
ブゥン！ガシッ！
「デュワ‼？」
フォン！ドォォン！
「ウグ⁉？」
ダーラムは迷わず赤い巨人に強力なパワーで殴りかかるが赤い巨人はそのパワーを利用して一本背負いの容量で投げ飛ばしていた。
「ヒャヒャヒャ！俺はダーラムとカミーラと違ってお前の事が嫌いだったんだよ‼？」

ブォン！
その頃、ヒュドラはティガ・スカイタイプに自慢のスピードを使った攻撃を仕掛けるが…
「デュア!!?」
ガシ！
「なっ!!?」
だが…ティガ・スカイタイプはその手を掴みホールドした後、片方の拳を額に当てて姿を赤一色の形態であるティガ・パワータイプに姿をかえた。
「ガッ!?」
ティガがパワータイプになったと同時に首を絞め付けるパワーが強くなり、ヒュドラはもがいていたが圧倒的なパワーを前に動けずにいた。
「チ、チクショー！話しやがれ！」
ガッ！ガッ！
ヒュドラは自由な片方の腕で攻撃するもティガ・パワータイプとなった今、防御力も跳ね上がっておりダメージは皆無に等しかった。
その頃、赤い巨人対ダーラムの戦いはいつの間にか睨み合いの状態に陥っていた。
「…」
「…」
それもそのはず、ダーラムは投げ飛ばされているうちに察したのだ、この巨人は自分のパワーに対抗出来ないと悟り投げ技ばかり扱うことを、分かったらしい…だから、それで膠着が続いていたら、
「ディア！」
ドオオン！
先にこの静寂を破ったのは赤い巨人だった、赤い巨人はダーラムに殴りかかるが、ダーラムはそれを敢えて受けた、衝撃は響いたもののダーラムは平然としていた。
「ヌウウウン！」
「ディアアアア!!?」

ダーラムはそのまま赤い巨人の腹に一発パンチを入れそのまま吹き飛ばした、赤い巨人はビルに激突し地に伏してしまう…
「中々、楽しめたぞ…ヌゥゥゥン‼?」
ダーラムは両手にエネルギーを為、必殺の一撃でありティガ・パワータイプのデラシウム光流並みの威力を持つ大技【ファイアマグナム】を放とうとした時だった。
「シュア‼?」
「グハァ…」
ネクサス・アンファンスが放った光線技・クロスレイシュトロームがダーラムに命中し怯んだ。
「デュア!」
赤い巨人は立ち上がり腕にエネルギーを貯めた後、腕をL字に組んで【クァンタムストリーム】を放った、だが…
「ヌゥゥゥン!」
「‼?」
ダーラムはそれを右腕で弾きクァンタムストリームを防いだのであった、それには流石のネクサス・アンファンスと赤い巨人も驚いていた。
「ヌゥゥゥン…やるな、だが…お遊びもう終わりだ」
ダーラムのそのセリフを吐いたと同時に力がまし、ネクサス・ジュネッス戦よりもパワーアップしていた、だが…彼等は知らないダーラムの実力がこれでも三番目だということを…
「テュア!」
それを見たティガ・パワータイプはヒュドラのホールドを一旦解いた後、再びヒュドラを捕まえ【ウルトラヘッドクラッシャー】を放ったのであった、ヒュドラはそれを喰らい気絶してしまい、ティガ・パワータイプはそれを確認した後…ダーラムに飛び掛った。
「テエア!」
「デュア!」
「ヘアァ!」
それを見たネクサス・アンファンスはネクサス・ジュネッスへと姿

を変えて赤い巨人と共にダーラムに挑み掛ったのであった。
その頃、ネフシュタインの鎧の少女と翼は驚愕するような顔で奏を見ていた、そして…今向かっている車の中にいる櫻井了子もそれを見て驚いているからだ。
「か、奏…いつ日本に？てっ…あれ？確か絶唱の反動で体が動かなくなったんじゃないの？」
翼は弦十郎から奏は海外の病院で治療中だと聞いていたからだ。
「？、何言っているんだ翼…私はずっと日本にいたけど？……もしや、おい！弦十郎のおっさん！翼が勘違いしているけど、もしかして本当のことを言ってないな‼？」
だが…本当はダイゴが所属しているスーパーＧＵＴＳの医療施設に入りそこで治療していたのだ、奏はてっきり弦十郎が翼に伝えていると思っていたがどうやら違うことを喋っていたことを怒っていた。
「だけどまぁ、いいや…さて、翼をいじめた礼はこれで返して貰うからな？」
奏はそう言ってガングニールの槍をネフシュタインの鎧の少女に向けた、ネフシュタインの鎧の少女は違うことを考えていた。
（フィーネ…話が違うぞ、クソ…ここは引くしかない…）
ネフシュタインの鎧の少女はそう思って逃げていった、奏たちは追わずにそのまま深追いはしなかった。
ドシィィィィン‼？
「な、なに？」
突然の振動に響たちはその方向を見るとそこには…
「ヘヤアァァ…」
「デュァァァ…」
地に伏しているネクサス・ジュネッスと赤い巨人の姿があった、装者がネクサス・ジュネッスと赤い巨人が吹き飛ばされた方向を見るとティガ・パワータイプとダーラムの殴り合いに発展していた。
「テュア！」
「ヌゥウゥン！」
ドオオン！

それを見た奏はジャンプしてガングニールの槍を構え、ダーラムに向かって投げつけたと同時に無数の槍が現れそのままダーラムに命中した。
「ヌン！」
ダーラムはそれを喰らって怯んでいるうちにティガ・パワータイプは両拳を額に当て赤紫銀の三色になった、その姿はティガ・マルチタイプと呼ばれる形態でになりエネルギーを両手に貯めていた。
「‼？」
それに気付いたダーラムは接近しようとしたが…
「ディア！」
シャン！
「シュア！」
ヒュン！
赤い巨人が放った光弾とネクサス・ジュネッスが放ったバーティクルフェザーがダーラムに命中し怯みそして…
「テュア！」
ビゥゥゥゥゥン！
ティガ・マルチタイプの放った【ゼペリオン光線】は真っ直ぐダーラムを捉え放とうとした時だった。
ビュン！
「ジュア‼？」
背後から光弾が命中し、ティガは放つのをやめ光弾が来た方向に振り向くとそこにはネクサス・ジュネッスと以前交戦したカオスウルトラマンがそこにいたらそれを見たダーラムはヒュドラを持ち上げると引き上げて行った。
「……」
カオスウルトラマンは三体の巨人を見つめた後、空を飛び去って行ったのであった、それを見た三体の巨人は変身を解いていた。
その頃、シンフォギアの装者の方では翼が奏に抱きつき涙を流していた、響もまたその光景を見て笑顔になったりとそして…その後、彼女らは弦十郎たちと合流して二課に戻っていった。

その頃、流れ星を見ていたムサシは昔出会った一人を思い出していた。

「そういえば…あの子は元気かな？」

その少女は銀髪でツインテールの女の子で、一緒にコスモスを見たあの少女の事をそして、その約束を…

「ムサシ！これをもってて！」

「……ちゃん、これって？」

「お守りだよ、あと次会う時は……だよ」

「うん‼？約束するね…」

とムサシが思い出していていた、頃…その少女もまた、思い出していた、彼のことを…

これから再会することになると知らないで…

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ…

脅威！カオスウルトラマン！

ダーラムとヒュドラの襲撃から数時間後…
ここは特異災害機動部二課の司令室…そこに何時ものメンバーの他に見覚えのない方々がいた為弦十郎は頭を抱えていた。
「さて…何処から話せばいいんだが…」
それは奏の回復が予定よりも早かったことと、ダイゴが来たからである、ダイゴは今の所は設立途中の地球防衛隊・スーパーＧＵＴＳのメンバーであると同時にＧＵＴＳの隊員でもある。
スーパーＧＵＴＳとはナイトレイダー、ＴＥＡＭＥＹＥＳ、ＧＵＴＳ、ＧＵＹＳ、ＸＩＧなどの特殊防衛チーム（国防軍及びＧ．Ｕ．Ａ．Ｒ．Ｄは解体されない）などを統合して出来る予定の部隊で特異災害対策一課と二課も編入予定の防衛チームである。
「しかし…この状況はいつ陥った？」
弦十郎が余計悩んでいるのは別の理由もあった。
「つまり…お兄さんがあのザ・セカンドだったのですか？それはい、いつから？」
「それはダイゴに聞いてくれ、私に聞かれても困る」
「まぁ、順を追って話すから落ち着いて…」
「これが!!?落ち着いてなど入られませんか!!?お兄様！早く話して下さい!!?どうしてザ・セカンドになったのかを！」
「落ち着け！取り敢えず落ち着け！」
と翼が冷静ではなくなり、ダイゴと奏がとても困っていたり…
「そうですね！私は自分なりに頑張ってみます！」
「はい、それがいいですよ」
響が翼のマネージャーで、二課のＯＴＯＮＡの一人である緒川慎次に悟られていたり…
「これがガイアか…もっと詳しい話を!!?」
ガシ!!?バキボキバキボキ!!?
「痛い痛い痛い痛い!!?離して！指が指がァァァァ!!?」
ＸＩＧの隊員でスーパーＧＵＴＳに編入予定の少年、高山大地は二

課の方でも戦闘力が高い（シンフォギアを纏った装者並のパワー）カズキに両手を握られ、指から変な音が聞こえてくるほどだった、流石の弦十郎も我慢の限界が来たのか…
「テメェら‼？大人しくしろ‼？話もできないじゃねえか‼？」
「……」
　弦十郎はキレたと同時に話していた、みんなは黙り込んでしまったと同時に弦十郎は奏のことを話し始めた。
「奏は二年前のノイズのライブ襲撃の後、病院に運ばれたが…なんとか一命を取り留めただけだったんた、だが…ダイゴがＧＵＴＳのツテでＧＵＹＳの病院に入れて貰ってオーバーテクノロジーで治療をして貰ったんだ…ただ、そのことはダイゴから内密にする様に言われていたから、外国の病院に移ったと言ったんだ」
　それを聞いた事情を知っていたメンバー以外はかなり驚いていたが…（特に翼が）
「それじゃあ司令、僕と奏は隊長に報告する事があるのでこれで…あ！それと大地、お前は残ってみんなのオペレーターのサポートを任せたからな」
　それを聞いた大地はとても驚いていてこう言っていた。
「ちょ！ちょっと待って下さい！それは聞いてない…」
「じゃあ、頑張れよ…後輩！」
「翼…私もダイゴと一緒に戻るから、またな」
「ま、待ってかな…」
「ちょ！ダイゴサァァァァン⁉？」
　そう言ってダイゴと奏は司令室を出て行って行った、それを見ていた翼と大地はえーという顔をして見ていた…それから2日間様々な事が起きていた、響が落ち込んで親友の未来と緒川のおかげで立ち直った後、弦十郎の元で修行（カズキもまた鍛え治そうと加わった）を受けたりしていたのだった。
　そして時が流れ…
「私のドラテクは凶暴よ‼？」
「…マジスカ？」

デュランダルを運ぶ作戦…天下の往来独り占め作戦が始まった、何故…この作戦が始まったのかそれはお偉いさんの乗った車が何者かに襲われ、殺害されデュランダルの移設計画が始まったからである。
「ディア‼?」
「シュア‼?」
「ハァ‼?」
初っ端からカズキがウルトラマンネクサス・ジュネッスに、ダイチがウルトラマンガイアとなり、そこに現れたカオスウルトラマンカラミティと戦闘を始めていた。
「これだけ置いて逃げちゃう?」
「それは駄目ですよ!」
その頃、響と了子はノイズに囲まれ身動きが出来ない状態に陥っていた。
「それもそうよね…」
「‼?」
ドオオオン!
と了子が響にそう言い返すと、ノイズが二人を襲撃し始めていた。
「うう…いてて…り、了子さん?」
響は目の前でなんかバリアを張っている了子を見て驚きの声を上げていたが、了子は響の表情を気にせずにこう言った。
「自分のしたいようにしなさい」
「はい!」
それを聞いた響は返事をした後に歌を歌い、ガングニールを纏ってノイズの群れに向かっていった。
「ディァァァ‼?」
「シェアァァァ‼?」
ズゥゥゥン…
「フン!」
その頃、ガイアとネクサスはカオスウルトラマンの猛攻を前に手も足も出せずにいた。
「シュア!」(奴の強さはあの三人よりも強いな)

「ディア！」（ああ、データベースを見る限りではあの巨人はザ・ファーストの第二形態、エクリプスの戦闘力をコピーしている…だから！）
ガイアの言葉にネクサス・ジュネッスはうなづき二人は違う方向に向かって走り出したら。
「？」
それを見たカオスウルトラマンカラミティは奴等が何をしたいのか分からずに困惑していて動けなかった。
「ディア！（今だ！カズキ！）」
「シュア！（合点！）」
ガイアはネクサス・ジュネッスに合図を送り、それを見たネクサス・ジュネッスは…
「シュアァァ！」
シャァァァ‼？
クロスレイシュトロームをカオスウルトラマンに向かって放った。
「ハァ！」
ビュン！ガァァァァァァ‼？
だが…その光線はカオスウルトラマンが張ったバリアに弾かれていた。
「ディア！タァァァァァ…」
シュン…パァァァァ！
「ディァァァァ！」
シュルシュルシュルシュル！
ガイアはカオスウルトラマンがネクサス・ジュネッスの放ったクロスレイシュトロームを防いでいる隙を突いて、ガイアの最大の必殺技であるフォトンエッジを繰り出した、だが…
「シュア！」
カオスウルトラマンはバリアを消すと同時に空へと飛び上がり、それらの光線を回避した。
「シュア⁉？」
「ディア⁉？」
それを見たガイアとネクサス・ジュネッスは少し驚いていて足を止

めてしまった、それを見たカオスウルトラマンカラミティは好機とばかりに…
「ハァ!!?」
ザ・ファースト…ウルトラマンコスモス・コロナモードの技であるネイバスター光線のコピー技であるカオスバスター光線をネクサス・ジュネッスに放った。
バシィィィン!
「セァァ!?」
ガシャァァァン!!?
ネクサス・ジュネッスはカオスバスター光線を直撃し、そのまま宙を舞い工場を巻き込みながら地面に倒れたと同時に変身が解かれた。
「ディア!?（カズキ!?）」
ネクサス・ジュネッスの変身が解けた姿を見たガイアは少し驚いていたが、すぐにカオスウルトラマンカラミティに向き直りそのままガイアスラッシュを放とうとしたが…
「ハァ!」
ダァァン!
「ディア!?」
ドカ!ドゴォ!バキ!!?
「ディアァァァァ!?」
ガァァァン!!?
カオスウルトラマンカラミティは高速移動でガイアに接近し、それに気づいたガイアは殴ろうとしたが、その暇も無く連続パンチを喰らってそのまま工場に沈んだ。
ガシャ…ダッ…
ピコン!ピコン!
「…ディ、ディア」
ガイアは少し朧げながら立ち上がり構えを取ったが大分消耗したのか、カラータイマーが鳴っていた。
「フフフ…」
「ディアァァァァ!!?」

それを見たカオスウルトラマンカラミティは笑顔を見せていた、それを見たガイアは少し気味が悪いと思ったが立ち向かわなければと思いそのまま向かって行った、そんな時だった…
「シュア！」
バァァン！
青い閃光がカオスウルトラマンに襲ったのは…
「⁉︎⁉︎」
カオスウルトラマンは何が起こったのか分かっていたのか、空を見上げていた。
「シェア‼︎」
そこにいたのは先程、カオスウルトラマンカラミティのカオスバスター光線が直撃し、変身が解けた筈のネクサスだった、ネクサスは先程のジュネッスの赤とは違い青い体色に変わっていた。
「ディア⁉︎（カズキその姿は？）」
ガイアは青いネクサスに尋ねるとこう答えた。
「シュア（これが本当の奥の手、ジュネッスブルーだ）」
ネクサス・ジュネッスブルーはガイアにそう答えると、カオスウルトラマンに向き合った。
ウルトラマンネクサス・ジュネッスブルー…その姿こそがカズキの本来の力でありレンから引き継いだ光を自分の力に変えた姿である、動きやすい姿であると同時に総合能力はジュネッスを軽く上回っている。
だが…カズキは気付いていた。
（奥の手を解禁したはいいが勝てないな）
この姿を用いても決してヤツ、カオスウルトラマンには勝てないことを…
（さて、どう戦うか…）
とネクサス・ジュネッスブルーが考えていた時だった。
ビュアアアアアアアアアアアアアア‼︎‼︎‼︎‼︎
「「⁉︎」」
謎の金色の光の柱が伸び、そのままネクサス・ジュネッスブルーた

ちの方向に向かってきた。
「シュア！」
　それを見たネクサス・ジュネッスブルーは喰らったらヤバイと思い、急いでガイアに接近し、担いでそのまま上空へと飛び上がりその光を回避したのだった。
（こ、これは…）
（ひ、ひどい…）
　ネクサスとガイアが見たのは斬られたみたいな跡を残した、工場地帯の姿だった…
　ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ…

宇宙から来た戦士…

「おい！弦十郎のおっさん！響の容態はどうなっているんだ！」
　とカズキ達は天下の往来独り占め作戦の後、とある病室に来ており響の容態を弦十郎に尋ねていた。
「いや、命に別状は無い…心配するな、それともなんだ？好きな女の子が少し倒れたからって心配しているのか？」
「そうだよ！好きだよ！心配して悪いか！」
　と弦十郎はそう答えつつ冗談交じりにそう言うとカズキはそう答えた。
「それはそうとカズキ、お前に一つ頼みたいことがある…明日の昼ごろ、ある人物のいる学校に行ってもらえないか？それとその際はある人物が同行することになっている」
「ある人物？」
「それは会ってからのお楽しみだ、行け！」
「お、おう」
　とその後、いきなり真面目なトーンになった弦十郎からそのことを言われて彼はそう答るのだった。
「でも、俺…明日学校なんですが？」
「一日ぐらい休んでもバチは当たらんだろう、大丈夫だ！」
　とカズキはその後、弦十郎にそう言ったが聞き入れて貰えなかった、そして翌日…
「ここか？ＳＲＣアストロノーツ養成学校高等部は…」
　カズキは一足早く、そこに着いておりある人物を待っていた。
「すまない、待たせたな」
「え？貴方は⁉？」
「初めましてだな真木一樹、私は神隼人だ…今日はよろしく頼む」
　と暫くしてカズキはある人物から声を掛けられたので振り返るとそこにははＴＥＭＥＥＹＥＳの元隊長で今は新設予定の部隊であるスーパーＧＵＴＳの隊長を務めることになる神隼人（ジンハヤト）だったからだ。

「こ、こちらこそ…ところでどうして貴方のような人がこんな場所に？」
「ある人に会いに行くと言っただろう？カオスウルトラマンがいるから尚更、あいつの経験が役に立つ…行くぞ」
「は、はい！」
　とカズキはどうしてここに隼人がここにいるのか尋ねると、彼はそう答えるとカズキと一緒にＳＲＣアストロノーツ養成学校に入ったのだった。
「はっはっはっ…」
　タッタッタッタッタッタッタッタッ！
　その頃、響は何かを吹っ切るようにリディアン音楽院の運動場を走っていた、何故なら…
（暴走したデュランダルの力…怖いのは制御出来ないことじゃない戸惑いもなく力をあの子に払ったこと…私が何時までも弱いばっかりに…）
　クリスに向かって放ったデュランダルの力…その力を制御出来なかった自分に対しての不甲斐なさと怒りが彼女を突き動かしていたからだ。
「響…」
　それを心配そうに響の親友である小日向未来（こひなたみく）がそう見つめていた。
「久しぶりだな、ムサシ…元気にしていたか？」
「お久しぶりです、隼人さん！」
　と場所が戻り、ＳＲＣアストロノーツ養成学校高等部のある一室…そこでカズキたちは一人の男性と会っていた。
「ハヤトさん、この人は？」
「彼は春日井武蔵…あのザ・ファーストと呼ばれていた巨人…ウルトラマンコスモスだった少年だ」
　とカズキは隼人にムサシのことを尋ねた、それを聞いた隼人はそう答えた。
「この人が…ザ・ファースト…？」

それを聞いたカズキは少し疑うような目で見てしまっていた、何故ならとても優しそうな人があのザ・ファーストに変身しているとはとても考えらなかったからだ。
「やっぱり意外ですかね？」
「それもそうだろう、お前みたいな優男が一年も戦っていたのだからな」
とその表情を見たムサシは心中を察したのかそう言うと、皮肉るように隼人にそう言い返した。
「ところで要件は何でしょうか？こうして世間話をするためではないですよね？」
とムサシは何故隼人たちが来たのかを尋ねて来た、それを聞いたハヤトはこう言った。
「君の力を貸して欲しい、君の優しさと勇気が必要なんだ」
「……分かりました、手伝います」
それを聞いたムサシはそう答えた、それを聞いたハヤトはフッと笑った後に…
「取り敢えず、車に乗れ…話はそれからだ」
「はい」
そう言った後にハヤトはムサシを連れて特務災害機動二課へに向かう為に車に乗って向かった、その直後だった。
ピピピピ！ピピピピ！
ピッ！
「ん？もしもし…どうした、弦十郎？……分かった、すぐに向かわせる、カズキ君！響君がネフシュタインの少女と交戦中らしい、急いで向かってくれ」
「！、了解！行くぞ！うおおおおおおお！」
ピカァァァァァ！
突然、電話が鳴り響いてそれにハヤトが出た後…すぐさまカズキはネクサスに変身して向かうのだった。
「!!？、ティヤ！（ネフシュタインの少女？いや…アレは…）」
そこに向かうと何処かの林で響がネフシュタインの少女と交戦と

いうか、そこに居たのはネフシュタインの少女ではあるのだが、纏っているのはシンフォギアだった。
（ヤツもまだ奥の手を隠して居たのか？、⁉？）
ヒュン！
とそれをカズキが見た直後だった、何かの気配を感じたのか、カズキはそれをバレルロールで躱して向かって来た方向を見るとそこには…
「フッフッフ…決着を着けよう…」
「フッ⁉？ハァァァ…シェア！（ダーラム⁉？ならば！）」
赤い闇の巨人ダーラムがそこにいた、それを見たネクサスはすぐさまジュネッスに姿を変えてダーラムと向かい合うのだった。
「私は…歌が…大嫌いなんだよ！」
「歌が嫌い…それって…」
「ウルセェェェ！」
とその頃、響はネフシュタインの少女はそう言ってイチイバルと呼ばれるシンフォギアの力を解放して一斉攻撃を繰り出した、だが…
「なっ…盾⁉？」
「違う！剣だ！」
その一撃は巨大な【剣】によって防がれていた、それを見たネフシュタインの少女はそう叫ぶとそれを否定するかのように上から声が響き渡った、その声は以前までの緊張が無くなっていた翼の姿があった。
「行くぞ、立花！」
「はい！翼さん！」
と二人はそう答えてネフシュタインの少女へと強襲したのだった。
「シェア！」
「フン！」
バシィィィン！
その頃、ネクサス・ジュネッスはダーラムと激闘を繰り広げていた。
「フッ！フッ！ハァァァァァァァ！シュア！」
「ヌゥゥゥゥン！」

ドオオオン！
ダーラムはファイアマグナムを…ネクサス・ジュネッスはオーバレイシュトロームを…それらを放ってぶつけた後、互いにらみ合っていた。
「最初に戦った時から…貴様は強いと確信していた、だからここで決着を着けよう、光の巨人よ！いやウルトラマンネクサス！」
「シェア！（望むところだ！ダーラム！）」
とダーラムはそう言うとネクサス・ジュネッスに向かって突っ込み…それを見たネクサス・ジュネッスも構えを取りそのまま応戦した。
「デエヤ！」
ドオオオン！
「ウワァ⁉？（ぐぉ⁉？）」
だが、その後ろから無粋な邪魔が入った…カオスウルトラマンカラミティがネクサス・ジュネッスを後ろから攻撃したのだ、それを見たダーラムはカオスウルトラマンを睨みつけた、だがカオスウルトラマンカラミティが放つ強烈な殺意を前に怯んでしまった。
「……」
とカオスウルトラマンカラミティは何故か別の方向に身体を傾けるとそこにはムサシとハヤト、未来の三人がいた。
「シェア！（やらせるか⁉？）」
とそれに気づいたネクサス・ジュネッスはカオスウルトラマンカラミティに襲い掛かろうとするが…
ガン！
「すまない、邪魔をさせて貰う」
「くっ…そこをどけ！」
その前にダーラムが立ちふさがり、カオスウルトラマンカラミティを守り、その直後…
「ハァ⁉？」
カオスウルトラマンカラミティはムサシ達のいる道路に向かって手から光弾を放った。
「あいつ何を…」

「未来‼?」
「まて！立花！」
それを見たクリスは驚きの声をあげ、響は地面を駆けて未来達の元へ向かい、翼は響を追って行く…
「ムサシ！急ぐぞ！」
「はい！」
だが、無慈悲にも光弾はムサシ達の元へと向かって行く、そしてそのまま…
ドオオオオオオン！
爆発が無慈悲にも起こったら、だが…カオスウルトラマンカラミティの表情は突然仇敵にあったのかのように殺気を放った、それもその筈だ、何故ならその光弾は【紫色の線が入った白銀の巨人】により防がれたのだ。
「コスモス…」
「コスモス…」
とその巨人を見たムサシとカオスウルトラマンカラミティはそれぞれ違う感情でその名を呼んだ、ムサシは長年の親友にあったかのように…何故、二人がその反応を示したのか、簡単だ…その巨人こそがムサシが幼い頃に出会い、その後再会し真の勇者へと導いてくれた存在…
「ハァ‼?」
ウルトラマンコスモス・スペースコロナモード…今、再び地球へと舞い降りて、カオスウルトラマンカラミティと向き合ったのだった。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ…

激突！コスモス対カオスウルトラマン

「ハァ！」
「コスモスゥゥゥゥ‼？」
ウルトラマンコスモス・スペースコロナモード（以下コスモス・スペースコロナ）が現れた直後、カオスウルトラマンカラミティは迷わずにコスモスＳＣに向かって光弾を放った。
「フッ！ハァ！エイヤ！」
それをコスモスＳＣはそれらを全て目に見えないような速度で全て弾き飛ばし、後ろにいる三人に当てないようにする。
「ハァ！」
ブワァァン！
「グォ⁉？」
そして、コスモスＳＣはカオスウルトラマンカラミティにある僅かな隙を突いてウルトラ念力を放ちその動きを固定しそのままコスモスは空中を飛び、そのまま…
「エイヤ！」
バシィィィン！
「グォ⁉？」
テンダーキックを繰り出して接近戦へと移った、カオスウルトラマンとコスモスＳＣはお互いに空中で激しい高速戦闘を繰り広げるだが…
「ハァ！」
ドカァ！
「ウッ⁉？」
ズゥゥゥゥン！
スピードは互角だが、パワーに差がありコスモススペースコロナは大苦戦していた、それを見ていたムサシは手に青い石を持って立ち上がると駆け出した。
「コスモス！僕も戦う、だから…もう一度僕と…一緒に戦ってくれ！」
そして、ムサシは大きな声でそう言うとムサシは青い光に包まれて

カオスウルトラマンカラミティにマウントを取られて殴られているコスモスの所へと向かい、そして…

シャン…

「ティイ！」

ドカッ！

コスモスＳＣはカオスウルトラマンカラミティを蹴り飛ばして距離を取ると黄金の光に包まれてその姿を変えた、その姿は【強さ】と【優しさ】そして【勇気】を合わせ持った姿、その姿の名前は…

「フッ！」

ウルトラマンコスモス・エクリプスモード（以下コスモス・エクリプス）…コスモス最強形態であると同時にムサシとコスモスの絆の象徴でもある姿だ。

「シネ…コスモス、ハァ！」

「ハァ！」

ドオオオン！

その直後にお互いに光弾を放ちお互いを牽制する、そして…

「エイヤ！」

「ハァ！」

バシィィィン！

お互いに強力な一撃を繰り出した後に再び目に見えない速度で戦闘を再開した。

「シェア！」

「ヌゥゥゥゥン！」

ドオオオン！

とカオスウルトラマンカラミティとコスモスＥが激闘を繰り広げる頃、ネクサス・ジュネッスはダーラムとひたすら殴り合っていた、ネクサス・ジュネッスはなるべくダメージを受け流し、そのままカウンターを放ちダーラムはまさしくパワーで純粋に殴っており、二人に共通して言えることは…

「シェアァァァァ！」

「ウォオオオオ！」

ドオオオン！
だだ…目の前にいる敵を倒すこと、それだけだった。
「どういうことだ！フィーネ！私のやり方じゃ戦争の火種が無くならないって…」
その頃、響達はクリスを追い詰めた後に現れた黒幕が現れそのような会話をしていた。
「ええ、そうよ…もうあなたはいらないわ」
とフィーネと呼ばれた黒幕はそう言った直後にノイズが三人の元へ強襲し、その隙をついてフィーネは消えクリスもそれを追うように消えた。
「クリスちゃん…」
とそれを見た響は彼女の名を呟いた、そして…
「サラバダ、コスモス…マタアオウ…」
それを見たカオスウルトラマンカラミティもまた、消えていった。
「ティ‼？（⁉？、待て！）」
とコスモス・エクリプスモードはそのまま追おうとしたが、この時には既に奴の姿は無く見失っていた。
「ハァァァァァァ！」
「ヌゥゥゥゥゥゥン！」
そして…ダーラムとネクサス・ジュネッスの戦いは佳境を迎えていた、何故なら二人の戦いは殴り合うだけで既に消耗していたからだ。
「シェァァァァァァ！（これで終わりだァァァァ！）」
「ヌゥゥゥゥゥゥゥゥン！」
そして、二人はもう時間がないことを悟ったのか最後にお互いの顔を殴った、俗に言うクロスカウンターである。
「ハァ…ハァ…」
それを喰らったネクサス・ジュネッスはアンファンスに戻ると同時に胸にあるエナジーコアが鳴り渡る、それを見たダーラムが勝利を確信したその直後だった。
「ぐぉ…」
ダーラムは地面に倒れ己の身体を見た、そこにはネクサスの光エネ

ルギーが彼の身体を内側から壊していた。
「俺の負けだな…マイライバル」
　それを見たダーラムは仰向けに倒れ、ネクサスに向かってそう言った後にこう言った。
「覚えておけマイライバル、フィーネはお前達のすぐそばにいる…」
「シェア！（どういうことだ！）」
　とそれを聞いたネクサスはダーラムにそう尋ねたが、既に彼は虫の息であり最後にこう言葉を残した。
「マイフレンド…出来れば、俺はお前の手で消滅したかった…」
　そして、ダーラムの身体は光の粒子となり消え去った…それを見届けたネクサスはカズキへと戻り響達の元へ向かった。
「響！大丈夫だったか？」
　と彼がボロボロ身体に鞭を打って戻るとそこには響の姿が無く…いるのはハヤトとムサシだけだった。
「あっ…ムサシさん、さっきは助かりました」
　とカズキはムサシにお辞儀すると彼は笑顔でこう言った。
「いや、気にしなくていい…そんなことよりも早く帰って上げた方がいいと思うよ」
「え？なんでですか？」
「いいから早く！」
「は、はい！」
　とカズキはそのまま走って機動六課へ帰路に着いた、それを見届けたムサシはハヤトに視線を合わせるとそれを察したハヤトはうなづいた後にムサシはそのままある方向に向かって走りだした。
「あれ？響、なんで泣いてるんだ？」
　とカズキは本部に戻ると既に夜となっており弦十郎に報告を済ませてから帰路に着いた、その途中に泣いている響を見つけるとそう話しかけた、その直後だった。
「ヒグ…グス…うわぁぁぁん！」
　突然、響が泣き出してカズキに泣きついたのだ…抱きつかれたカズキはなにも聞かずに抱き締めたのだった。

to be continue…

幼き日の約束

「大丈夫か？響…」
「うん、ありがとう…カズキ」
「い、いや…気にするな」
　ここはカズキが下宿している寮、そこにルームメイトのレンはおらず…いるのは響とカズキの二人だけだった。
「どうして、あそこで泣いてたんだ…」
「うん、親友と喧嘩してね…それで気まずくて出て行ったんだ」
「そうか、まぁ…喧嘩した理由はさておき、ご飯食べてないだろ？作るよ」
「え？いいの‼？」
「もちろん、今日はルームメイトは帰ってこないから」
　響とカズキはそう会話した後、カズキはご飯を作って響に振る舞った。
「ほれ、簡単ながらチャーハンを用意したぜ…食べなよ」
「うん、ありがとう…美味しい」
　その後、カズキと響はそれぞれの学校生活の話をし始めた…二人はそれぞれの話に笑い、驚いていた、はたから見れば二人の会話は恋人同士がしてるように見えていた、そして…
「もう、こんな時間だな…今日は泊まって行きなよ、それに門限とかあるだろう？」
「うん、ありがと」
　カズキは響にそう言うと布団を二つ敷いたのだった、そのあと眠りに就いた、そして…
　翌日…
「昨日はありがとう、カズキ」
「いや、気にしなくて大丈夫だ…それより、学校に遅刻するぜ」
　そう会話した後、二人は各々の準備を終えて出発した…その後、響は昨日と同じ教科書しか持って来なかった為に先生から怒られて周りから昨日帰ってないことを友達に追求され、一方カズキは昨日、女

連れ込んでたんだろと突っ込まれそれ聞いて来た連中を血祭りにあげていた？
「よ、カズキ！」
「お久だぜ、レン……」
　そしてカズキはそれを聞いて来た連中を血祭りにあげまくった後にあるものを調べて貰っていたレンととある教室で合流していた。
「はい、これ……割と調べるのに時間かかっちゃった」
「いや、大丈夫だよ……かなり時間が掛かったってことはかなり重要なものなんだろ？」
「ああ、立花響についての……まぁ、今日までのデータだな」
「ありがとう」
　カズキはレンから封筒を受け取るとその場で開けて中身を見る、そこに書かれていたのはあの時の事件、ツヴァイウィングのノイズ事件だった。
「響も来てたんだ、あの会場に……」
「ああ、そのようだ……その後一命を取り留めた後に壮大ないじめにあった、そして彼女は壊れた」
「一種のサバイバーズギルドなのか、響は……」
「ああ、だからこそ自分という本来なら天秤に当たる部分がない……彼女は自分のことよりも他人を大事にする……」
「……」
「だが、そんな彼女をギリギリ人間のままにしているのは小日向未来という女の子だ、早急に仲直りしてもらわないとな」
「だな、だがそれは本人たちの問題でもあるからさ……ここは静観しようと思う」
「お前らしいな……さて、俺はお前に言われた【フィーネ】について調べることにするよ」
　この会話のあと、カズキはレンと別れようとした時に通信が入る……それはノイズが出現したという情報だった。
「レン、調べるのよろしくな！」
「任された」

そしてカズキはレンにそう言うと教室の窓を開けて外に出てネクサス・アンファンスへと変身して急いで現場へと向かった。
「ムサシ……なんでここにいるって分かったんだ……」
「なんとなくかな……ここは色々と思い出すことあるし」
その数時間前、高台にある公園（蘇る古代の巨人参照）……そこはかつてムサシがコスモスと出会った場所であると同時にクリスとの思い出が詰まった公園でもあったからだ。
その場所でムサシは片手にとあるバーガーショップの紙袋と星を見るための双眼鏡を持って来ており、先客がいることを見つけるとその先客、雪音クリスからそう尋ねられ彼はそう返した。
ムサシは道具諸々だけを地面に置くと紙袋を持って体育座りで座ってるクリスの隣に座る。
「そか……てか、まだここ使ってたんだな」
「星を見るのに適してるからね……それにここは僕たちの始まりの場所だろ？」
「それもそうか……ここから始まったんだよな、私たちの夢ってさ」
そう、この場所で二人はある約束をした……ムサシは宇宙飛行士に、クリスは父や母のような歌い手になることを、二人の夢はとても難しくとても大変なことだが二人は夢を叶えようと決めた。
「……今の私はあの時のわたしには見せられないな」
「……」
だが、クリスは既に自分が嫌いになっていた……争いを無くすために頑張っていたはずなのに、夢を捨ててまで頑張ってきたのにここでそれらが全て無駄になったという事実……それらが過去の自分の気持ちを踏みにじったことになると思い独白した。
「そんなことはない、クリスの争いを無くすという目的は正しいんだ……だけどやり方を間違えただけだ」
だが、ムサシはそれを否定した……彼はクリスは間違ってないとそう断言したのだ。
「クリス、君がやってた方法だと奴等はまたそれ以上の力を持ってまたそれを繰り返す、それを繰り返すだけなんだ、争いを繰り返さない

そのためには言葉で、気持ちでぶつかるしかない……時には拳を使うこともあるかもしれない……けどそれは分からず屋に使うんだ、何事も暴力では解決できない言葉が必要なんだ」
「……」
ムサシはそう言うとクリスに手を差し伸ばす。
その手はまるで昔のように共にまた夢を追いかけようという意思を感じられた。
「だからクリス、やり直そう……今ならまだまた追いかけられるよ」
「ムサシ……」
クリスはムサシのその言葉を聞いて手を握り返そうとした……それを見たムサシはホッとした表情をした後……
「……」
クリスは手を握らずにその手を叩き弾いた後にシンフォギアを纏い、ムサシに腹パンした。
「……ごは、クリス？」
「ごめん、ムサシ……アタシにはまだやることがある」
「ま、まって……」
そしてクリスはその場を離れてどこかへ向かう、ムサシは呼び止めようとしたが彼女はその言葉を聞かずに飛び出していった。
「フッ！ハァ！」
そして今になる、街中に大量のノイズが現れそれを響とネクサスが別々に分かれて対応していた。
「フッ！ハァ！（数が多いな、今日も……ん？アイツは……）」
ネクサス・アンファンスは華麗な体捌きでノイズを殲滅すると巨大な揺れを感じたのその方向を見るとそこにはカオスウルトラマンカラミティが着地した衝撃であり、それを見たネクサスアンファンスはすぐに巨大化してジュネッスブルーへと姿を変える。
「コスモス……コスモスゥゥゥゥゥ!!!!!」
それを見たカオスウルトラマンカラミティは急激に吠えると同時にネクサス・ジュネッスブルーに襲い掛かる。
「フッ……ハァ！」

が、ネクサス・ジュネッスブルーはそれを躱すと同時にここでは被害が大きいと思い奥の手であるメタフィールドを展開して被害を押さえようと試みる。
メタフィールドとはネクサスが持つ固有能力の一つだ、この空間では時間の流れが異なりまた外へと被害影響は実質皆無であるが、代償として三分過ぎれば変身者は死んでしまう。
「ハァ！」
「アァァァァ!!!」
そしてネクサス・ジュネッスブルーとカオスウルトラマンカラミティはメタフィールド内で戦い始めるのだった。
「未来！写真撮ろ！」
「うん」
それとほぼ同じ時刻……響はネクサス・ジュネッスブルーと合流して互いに手分けしてノイズを倒すべく別れて行動していると未来とお好み焼き屋フラワーのおばちゃんがノイズに襲われているところに遭遇して、未来は自分が囮になることを響に伝えた後にノイズを引きつけ、響はお好み焼き屋フラワーおばちゃんを届けたい後、無事に未来と合流し無事に巨大なノイズを倒した後にガングニールの変身が解けた後、二人で写真を撮っていた。
「……ごめん、未来……私また行かなきゃ」
「うん、行ってらっしゃい……」
「ありがとう！行ってきます！」
そして響はある通信を聞いた後に未来にそう言うと再びガングニールを纏って大空を掛ける……夕陽へと消える少女を後ろから見ていた未来はこう呟いた。
「響……いつのまにか、私と同じくらいの陽だまりを見つけたんだ」
そう呟く未来の背後姿は少しだけ儚く、そして寂しそうに見えたのだった。
「ファァ!!!」
「アァァァァァァァァァァァァ!!!!!!」
「グァァ!?」

その頃、ネクサス・ジュネッスブルーはカオスウルトラマンカラミティの驚異的な力でメタフィールドを叩き出された後に腹部に強烈な蹴りを受けて吹き飛び山に激突する。
（メタフィールドをぶち破るとは……コイツ、イカれてやがる）
ネクサス・ジュネッスブルーは心の中で呟いた後に立ち上がって構えを取る。
（くっ……メタフィールドがダメなら遠くへ行かなければ……）
「アアアアア!!!!」
「ウッ……（考えてる暇は無いってか？）」
構えをとった後にことは別の場所に移動しようとしたが、その前にカオスウルトラマンカラミティは高速で迫り顔面に蹴りを入れようとし、それを防ぐが……ここからカオスウルトラマンカラミティは猛攻を始める。
両手両足をムチの用にしなやかに使い徹底的に反撃できないようにするカオスウルトラマンカラミティの圧倒的な攻め……
その圧倒的な攻めを前にネクサス・ジュネッスブルーも対応するがあまりの速さに対応出来ず動けなくなる。
「フッ！ハァ！」
だが、ネクサス・ジュネッスブルーは隙を見つけるとタイミングを合わせて蹴り飛ばして距離を取る。
（コイツ、以前と戦い方が違いすぎる……こんな獣みたいな動きではなかった、てかここまで攻めに転じられると俺は動けない、ならばこちらから……っ!?）
ネクサス・ジュネッスブルーはそう解析して攻めに入ろうとするがすぐにカオスウルトラマンカラミティは攻撃に転じる。
「フッ！ハァ！」
「フハハハハハ!!!」
そしてこのまま押しが負け地面に仰向けになって倒れるとカラミティがこのままトドメを刺されそうになるその時だった。
「ハァァァァァァァ!!!!」
上から黄色い閃光が降ってきてカオスウルトラマンカラミティの

首筋に強烈な打撃を繰り出したからだ。
「……ネクサス、助けに来たよ！」
その黄色い閃光の正体は立花響だった。
響は一撃を入れた後にネクサスの肩に飛び乗り笑顔を見せるとそれを見たネクサス・ジュネッスブルーいやカズキは昔のことを思い出していた。
『だいじょぶ？わたしにまかせて！』
それを思い出したネクサス・ジュネッスブルーは響にしか分からない笑顔を見せた後に立ち上がる。
「うがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!」
響から強力な一撃を喰らったカオスウルトラマンカラミティはすぐに立ち上がるとネクサス・ジュネッスブルーと響を睨み付ける。
「行くよ！」
「セヤ！」
二人はお互いに視線を送った後、カオスウルトラマンカラミティと相対するのだった。
ｔｏ　ｂｅ　ｎｅｘｔ……

究極のカオスウルトラマン誕生……その名はノイズ

「ハァ！」
「アアアアアアアアアア!!!」
カズキことウルトラマンネクサス・ジュネッスブルーと響は共にカオスウルトラマンカラミティ立ち向かっていく。
まずネクサス・ジュネッスブルーが奴の気を引きつけるべく攻撃を仕掛ける。
「フッ！ハァ！」
ジュネッスブルーの放つ鋭い蹴りはカオスウルトラマンカラミティを捉えるが、奴はそれを躱してそのままカウンターを決めにくる。
「そこだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」
が、その直後に再び首筋に響の跳び蹴りが炸裂するが先ほどまでと状況は違うので威力は抑えめになり、怯む程度となる。
それを確認した響は急いでその場を離れて再び放つ体制に入るが、それをカオスウルトラマンカラミティは見逃す筈も無く捕らえようとするが……
「(そこだぁぁぁぁ!!!) セヤァァァァァァ!!!」
その隙をついてネクサス・ジュネッスブルーが回し蹴りを繰り出して蹴り飛ばしそのままラッシュの追撃に入る。
「ハァァァァァァァァァァ!!!(これでどうだァァァァァァァァァァ!!!)」
そのラッシュの速度はとても早く、流石のカオスウルトラマンカラミティも防戦一方となっていたがすぐに持ち直して反撃に転じネクサス・ジュネッスブルーを蹴り飛ばす。
「まだまだぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!」
が、すぐさま響の突撃パンチ(俗にいうスクラップフィスト)を放つが既に二度喰らってるカオスウルトラマンカラミティはそれを躱すが……
「フッ！ハァァァァァ……セヤァァァ!!!(余所見禁物だぞ！コラァァァァ!!!)」

それをネクサス・ジュネッスブルーが手に作った球体でそのままの勢いでキャッチし、その勢いを更に加速させるように一回転してそのままぶん投げる。
「ぐお……おぉ……」
カオスウルトラマンカラミティはその一撃を腹部で喰らい、膝をつく……どうやらこの一撃は今までの中で一番効いたのか地面に膝を付け、響はボールがスーパーボールの如くぴょんぴょん移動して安全域まで移動する。
「（一気に決める）フッ……ハァァァァァ……」
それを見たネクサス・ジュネッスブルーは腕にエネルギーを集中してアローレイシュトロームを放とうとする。
「アァァァァァァァァ!!!!」
が、カオスウルトラマンカラミティは叫び声をあげると同時に衝撃波を放ってきた。
その衝撃波かははとんでもない力を感じたネクサス・ジュネッスブルーはエネルギーを貯めるのをやめて急いで響を衝撃波から守るためにかばう。
「フッ……（いない？）」
ネクサス・ジュネッスブルーは響を衝撃波から庇った後に正面を向いたがそこには既にカオスウルトラマンカラミティの姿は無くなっており、それを見たネクサス・ジュネッスブルーは変身を解いてカズキに戻り、響の元へと向かう。
「大丈夫か？」
「うん、大丈夫」
それを見たカズキは安心した後にふと響の表情を見て色々と察する。
（そっか……仲直りしたんだな）
そう考えていると突然、カズキは響に手を握られた後にこう言われる。
「私の親友を紹介するよ！」
「ああ、だけどそれは今度にさせてもらうよ……流石に眠い」

こうして二人はそう話した後に仲良く歩いて帰路に着く、二人は暫く一緒に歩く。
「じゃあ、また明日な……響」
「うん、ばいばい！」
そして分かれ道に着くと二人はお別れをしてそれぞれの家に帰るのだった。
「……というわけで私達は別行動させてもらうわね、フィーネ」
「そう……けど、ダーラムの仇は取らなくていいの？」
「大丈夫よ、彼は彼で決着をつけたがっていた……望み通りに終われて本望でしょう、だから仇は打たないわ、それに相手も相手なりに全力で戦ってくれましたしね……」
その頃、ある館にて……周りには沢山の死体が転がっており、そこで二人の女性がある話をしていた、片方はフィーネと呼ばれる銀髪のロングの女性で、片方はカミューラと呼ばれた黒髪ロングで少しオーラが怖い女性だった。
「最後に質問だけど、彼の……カオスウルトラマンの調整は完璧なの？」
「ええ……だけど、仇敵の登場のせいで少し精神の方がやつれてるみたいね、これは計画を早める必要はあるわ」
「成功を祈ってるわ、フィーネ……」
「ええ……その時は全力で戦いましょう」
二人の女性はそう会話すると、カミューラは影に消え……フィーネは銀髪から茶髪になり眼鏡を掛ける。
「コスモスゥゥゥ……コスモスゥゥゥ……」
「ふふ……さて、完全聖遺物ネフシュタインの調整は完了し、後はもう起動あるのみ、最後に貴方の調整ね……カオスヘッダー、クリスから聞いていなかったら利用していなかったわね……」
そしてフィーネはソロモンの杖を取り出すとそれをカオスウルトラマンカラミティに埋め込む、するとカラミティは強烈な光を放つとその姿を変える。
「フゥゥ……フゥゥゥ……」

その姿はカラミティをベースに胸のコアのところがネクサスのジュネッスやジュネッスブルーのようなエナジーコアが現れ、更に背中には以前、現れたカオスヘッダーの集合体であるカオスダークネスのような翼が生える。
「ふふふ……そして、私を取り込め!!!カオスウルトラマンカラミティ!!!いや、カオスウルトラマンノイズ!!!」
そして最後にフィーネは高らかにそう叫ぶとカオスウルトラマンノイズはフィーネを吸収しその力を高め、そのエネルギーは最早……手がつけられないほどだった。
「フフフ……フハハハ!!!（これが力か……素晴らしい……素晴らしいぞ！力が漲る、溢れる！）」
そしてフィーネはネフシュタインの鎧やソロモンの杖の力の持つパワーでカオスウルトラマンノイズを制御下に置いて自身の力を確認し高らかに笑い終えると変身を解く。
「さぁ、計画実行と行こうか……ふふふ……はははー待っててください、ノア様……私が解放してみせますから」
フィーネの高らかな笑い声はこだまする……世界の終わりと始まりを告げるように、その後に謎の軍人達が屋敷の中に突入してくるが……彼らは成すすべなく全滅した。
「はっ、嘘だろ……」
その翌日、クリスはその館へと戻り衝撃な光景を目にした……そう、周りには大量の死体があったのだ。
「動くな！」
「!?」
それを見て驚いていると後ろからドアを蹴り破る音が聞こえ、そのあとに男性から銃を突きつけられ思わず手をあげる、周りには大量の黒服や何やらアーマーをつけた兵士達が厳戒態勢で銃を構える。
「アタシはやってない！アタシがきた時にはもうこうなってたんだ！しんじてくれよ！」
クリスはそう叫ぶが、周りのアーマーを付けた兵士はそれを無視し突き進む、それを見たクリスは驚いてると特異災害二課の風鳴弦十郎

が入ってくる。
「知ってるよ……君は何もしてないことはな」
「え？なんで！」
その直後だった、突然屋敷が爆発して瓦礫が二人に迫るがそれを弦十郎はそれを片手で防いだ後にクリスは色々と叫ぶ、今までのことが全て爆発し発散してるクリスに彼はこう告げる。
「大人を信用しろ、君はもう一人じゃない」
それを聞いたクリスは少し半信半疑になっていた、それは紛争地帯での経験から信用できないでいたが、最近、再会したムサシのお陰でもう一度信じようとする心は蘇っていた。
「……本当にあんたが信用できるかわからない、だけどうん、信用するぜ」
そしてクリスはそう答えた後、弦十郎とともにその屋敷を後にする。
その時だった。
「どうした？ダイチくん？なに、わかった！」
「ん？どうしたんだ？」
突然、ダイチから通信が入る……その内容は弦十郎にとって驚くべきものだった。
「学園にノイズが現れた……クリスくん、手伝ってくれるか？」
「もちろん……それにムサシも戦ってるんだろ？」
そしてクリスはイチイバルを纏って空を駆ける……以前は無かった力を手にして友達を守るべく。
「デュワァァァァ!!!」
リディアン音楽院では少し前にあったノイズ反応を検出し出動してる隙を突かれて大量のノイズが現れていた。
が、それを高山大地がウルトラマンガイアに変身して戦っていたからだ。
「デュア!!!（くそ、どれくらいいるんだ？おっと！）」
ガイアにはほかのウルトラマンと違い制限時間はない、だがエネルギーか切れかけるとカラータイマーがなるのだ。

ガイアはシェルターに避難しようとする生徒達や先生たちを守るべく奮闘するがそれでも数が多く苦戦していた。
「手伝うぜ、そこのウルトラマン!!!」
押し負けそうになった時だった、上からイチイバルを纏ったクリスの弾幕射撃か降り注いで大量のノイズを消滅する。
それを見たガイアは
「ふふふ……」
「くっ……」
ガイアが地上で奮戦しているころ、デュランダル保管室前にて色々あって天井をぶち破って入ってきた弦十郎はフィーネとなった櫻井良子と交戦していたが……
「良子くん……この力は……」
弦十郎はフィーネとなった良子の持つ圧倒的な力を見て驚く、なぜならそこから出ているオーラは人間ならざるものとなっていたからだ。
「……まさか、完全聖遺物を圧倒する人間がいるとは驚いた、だが流石にこの力までは対抗できなかったみたいだな」
そう、その力はカオスの力……カオスウルトラマンの力を手にし発揮した彼女を前に弦十郎は圧されていたのだ。
「……じゃあね、弦十郎楽しかったわ」
そしてフィーネはそう言ってデュランダルの保管室に入りガ・ディンギルを起動させる。
「さぁ、始まりだ!」
そして始まる、世界を始まりと終わりへ導く戦いが……
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ……

囚われのネクサス、決戦！ルナアタック！

フィーネがカ・ディンギルを起動する少し前……ノイズたちがどこかの工場に現れて襲撃しており、その中には今まで私立リディアン音楽院付近では現れなかった怪獣が現れていた。

「フッ！」

「セヤァ！」

「グォォォォォォォォン!!!」

「キュアァァァァァ!!!」

その怪獣の名は超古代怪獣の一種、ゴルザとメルバでありゴルザはコスモス・コロナ、メルバはネクサス・アンファンスと交戦していた。

「フッ……ハァ!!!（コイツ……すばしっこいなぁ……）」

「フッ……エイヤ!!!（なんてパワーだ……だけど……）」

当初、ネクサス・アンファンスとコスモス・ルナはゴルザとメルバを落ち着かせようとコスモスの技の一つで相手を落ち着かせる技であるフルムーンレクトを使い落ち着かせて帰るように促そうとしたが、ゴルザとメルバはそれが効かず、そのまま攻撃を仕掛けられてしまうが、すぐに二人は切り返しコスモス・ルナはコスモス・コロナという戦闘形態へモードチェンジしゴルザに向かって走り、ネクサス・アンファンスは大空へ飛び立ちメルバと戦い始め、苦戦しながらも徐々に怪獣を押し返して今に至る。

「ハァァァ!!!」

「ヤァァァァ!!!」

その頃、地上のノイズ戦も響と翼が蹴散らしながらどんどん倒していく。

「セヤァ!!!」

「デァァァ!!!」

そしてゴルザとメルバは各々の必殺技、ゴルザはブレージングウェーブ、メルバはクロスレイシュトロームを受けて爆発四散する。

「立花!!!」

「はい!!!」

そしてノイズの方も無事に殲滅し終わった後、翼の端末の方に連絡が入る。
「はい、わかりました……すぐにリディアンに向かいます」
リディアンの方でノイズが現れ今はクリスとガイアが交戦中という報告を聞きネクサスとコスモスは二人を手のひらに乗せて大空を飛んで移動を開始する。
「……!?」
その直後だった、リディアンの方から謎の砲塔が現れたのは……
「アレは……嫌な予感しかしないぜ」
カズキはそう呟くと急いで向かうのだった。
ほぼ同時刻……
「グッ……アア……」
「フィーネエエエエ!!!」
カ・ディンギル付近にてクリスはフィーネとガイアは相対し交戦していたが、二人ともボロボロで地面に膝を付けていた。
「ふふふ……この程度なの?ウルトラマン、そしてクリス?」
「舐めるな!!!」
クリスはフィーネにそう言われるとミサイルを展開し反撃するのだが、フィーネから発せられる黒いオーラによりすべて撃ち落とされる。
「ふふふ……クリス、貴方には感謝してるわ、だってこの力は貴方に教えてもらった力だもの、あの時……回収してよかったわ」
「くっ……ちくしょう……」
クリスはなんとか立ち上がろうとするが立ち上がらず、地面に膝をつく、何故なら彼女はフィーネから与えられたダメージ以外に一瞬でシンフォギアとウルトラマンを無力化した力を前に怯えていたからだ。
「デュワァァァァ!!!!!」
それを見たガイアは立ち上がり腕をL字に組んでクァンタムストリームを放つ。
「ふふふ……」

「!?」
だが、その攻撃は謎の障壁によって弾かれてしまい四散する。
「この程度なの?ウルトラマン?」
フィーネはそうガイアに言うと手にエネルギーを貯めて光弾を放つ、放った光弾はガイアに命中し地面を転がる。
「さぁ、これで終わりよ……」
フィーネがそう言ってとどめを刺そうとして光弾を放った時だった、彼女は遠くから来る銀色の流星を見たのだ。
「ハァァァァァ……シェア!!!」
その銀色の流星は光弾を蹴り飛ばしてから地面に着地して構えを取る。
「ハァァ……シェア!!!」
銀色の流星、ウルトラマンネクサス・アンファンスはフィーネを前に構えを取り、その直後に響、翼、コスモスが立つ。
「良子さん……なんで……」
響はフィーネにそう尋ねるが、彼女はその言葉を無視してある方向のみを見る、その先にはネクサス・アンファンスの姿があり頬を染めながらこう呟いた。
「ふふふ、待ってました……貴方様が来るのを」
それを聞いたネクサス・アンファンスは身震いをした後に精神の間へと移ふ。
「……(ノア、お前の知り合いか?なんか俺の方をじっくり見てるけど……)」
カズキは心の中にいるノアにそう話し掛けると彼は暫し彼女を見た後にこう答えた。
(……なるほど、彼女か)
「(知ってるのか?)」
(ああ……君に言った脅威がこの地球に来ていた際に暫く滞在していた時にお世話になっただけだ)
「(そういうことね、てか……完全にアンタに惚の字だぞ、あれ……)」
(ああ……だが、脅威になるならば倒すしかない……)

「(そうだな)」
　カズキはノアと精神の間でそう話した後に姿をネクサス・アンファンスからネクサス・ジュネッスブルーへと姿を変えてフィーネに向かって飛び込む。
「待って!カズキくん!」
　その後に響も続いて飛び込んでいく、コスモス・コロナと翼もワンテンポ遅れながら二人はそのままフィーネに向かって攻撃を繰り出すが、障壁によって防がれる。
「ヘア!?」
「か、硬い……」
「ふふふ、捕まえた……」
　二人はあまりの硬さに驚いているとフィーネはその隙にネクサス・ジュネッスブルーを拘束し、響、コスモス・コロナ、翼を地面に叩きつける。
「貴方様がここに来るのをずっと……ずっと待ってましたわ……だから……共に世界をバアルの呪詛から解き放ちましょう」
「ウ、ウォオオオオオオオ!!!!!」
　その後にフィーネは自身を中心に謎の空間を作りネクサス・ジュネッスブルーを閉じ込めた後に黒い球体を形成していく、
「カズキくん!!!」
「フッ……デア!!!」
　それを見た響は声を上げ、コスモス・コロナはコロナモード最大の必殺光線、ネイバスター光線を放つがその一撃は黒い球体に通用せずに弾かれる。
「ネクサスが取り込まれた……」
　それを見た翼はそう呟いた後に黒い球体は人型に変化した後に弾けて内部からフィーネが出て来て、笑みを浮かべる。
「カズキくんを……カズキくんを返せェェェェェェェェ!!!!!!!!!!」
「落ち着け!立花!」
　それを見た響は翼の言葉を無視して突っ込む、その時の姿はあの時に暴走してる姿を連想させた。

「うがぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!!!」
「無駄よ、ノア様はもう……この手にあるの」
　響は襲い掛かるがそれは再び障壁によって阻まれ地面に落ちる、その際にその姿は黒く染まっており暴走状態となっていた。
「また見せたか……だが、それでも私には勝てない、それを教えてやろう……」
「ウオオオオオオオオ!!!!!」
　響はそのまま襲い掛かるがそれは全て障壁によって防がれてしまう。
「ウゥゥゥ……アァァァァァァァァ!!!!!」
　響はそれでも攻撃を仕掛ける、無駄と知りつつも彼を助けるために攻撃をくりかえす、だが……
「いい加減、邪魔だ!!!」
　響は腹部に光弾を喰らい遠くへ吹き飛び地面に転がり倒れるが、すぐに立ち上がりフィーネを睨みつけた後にすぐに飛び掛かった。
「あの状態のアイツでも歯が立たないなんて……」
「立花!!!」
　そのあと、響は何度も攻撃を仕掛けるがフィーネは余裕にそれらの攻撃を防ぎ尚且つ一方的に攻撃を叩き込んでいく、それを見た翼とクリスは驚きながらもその戦いを見つめる。
「む?ウルトラマンがいない?まさか……」
　その中でフィーネは二人のウルトラマンがいないことに気がつく。
「デアァァ!!!」
　その直後だった、ガ・ディンギルの真上からコスモス・コロナがネイバスター光線、ガイアがクァンタムストリームを放っていたのだ。
「ほう……考えたな、だが……」
　しかし、その二つの光線はガ・ディンギルに届くことなく消えていく、まるでバリアに阻まれるかのようにそしてコスモスはある気配に気付く、その気配は何度も何度も戦ったカオスウルトラマンカラミティだったからだ。
「ハァァ……コス……モス……」

「フッ……!?（カラミティじゃない……これは……）」
だが、コスモスはその姿を見た時驚愕した……何故ならそこにいるのはカラミティでは無く進化したカオスウルトラマンノイズだったからだ。
「ウガァァァァァァァァ!!!!!」
カオスウルトラマンノイズは手にエネルギーを貯めると二人のウルトラマンに攻撃を仕掛ける。
「フッ!!!ハァァァァァ……フッ！」
「ウガァァァ!!!」
「グッ……ホァァァァァ!?!?!?」
それを見たコスモス・コロナはすぐさまコスモス・エクリプスに変身して相対するが、カラミティを超えるパワーとスピードに圧倒されてしまい、月まで吹っ飛ばされてしまう。
「エッ!?」
それを見たガイアは一瞬、何が起きたか分からずカオスウルトラマンノイズを見つめて力の差を実感していた。
「ディァァァァァ!!!」
だが、ガイアはそれでも諦めずに攻撃を仕掛けるが……ノイズの速度は思ったよりも早くすぐに躱されてしまい、地球に向かって蹴りつけられる。
「ヴッ……グァァ……」
その後、ガイアはフィーネから喰らったダメージもあったのか変身が解けて大地に戻る。
「……」
それを見たカオスウルトラマンノイズはすぐに地上のシンフォギア装者達を攻撃しようとするが……
「エイヤ!!!」
月に飛ばされたコスモス・エクリプスが飛び蹴りをカオスウルトラマンノイズに喰らわせて吹っ飛ばすがカオスウルトラマンノイズはすぐに態勢を立て直してこちらに向き直る。
「フッフッフ……」

それを見たカオスウルトラマンノイズは笑顔を見せた後にそのままコスモス・エクリプスに対して向き直る。

二人の宿命の対決がまた、始まろうとしてるのであった。

ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ……

絆の奇跡と未来の福音

「ここはどこだ……公園？」

カズキは目を覚ますとそこは公園だった、その公園は昔にレンとよく遊びに行った公園であり、なんで自分がここにいるのか分からなかった。

「……」

その後、カズキは公園を散策しているとある場面を目撃する。

それは幼い頃、ある少女に助けられたあの場面だ。

「顔が……顔が見えない……」

カズキはそのことを鮮明に覚えてるはずなのに声が聞こえず、顔も思い出せない……すると場面が変わり、工業地帯で大量のノイズに囲まれてる場面に変わる。

「……!!!」

顔が見えない少女がなにかを叫び装甲を纏う、その隣には自分もいて彼女を守りながら戦いその最中に青いギアを纏った少女と戦う。

「カズキくん……カズキくん!!!」

それを見ていた直後だった、彼は目を覚ますと映画館の中にいた。

手にはポップコーンとコーラ、服装はデートに行く際に来てそうな感じのコーデだ。

「もう、恋愛映画は苦手だったら言ってよ」

俺は隣にいる少女に妙な違和感を感じるが、それがなんなのかわからない……ただ、わかるのはこの”白髪の少女”が大切な人ということだけだ。

「次はどこに行く？」

「任せるよ」

そう彼女が尋ねてくる、俺はどう答えたらいいかわからないがこう返す、デートはわからないので彼女に任せようと思う。

この時、俺は違和感を感じるがそれを無視しようとすると窓ガラスにひとりの少女が写ろうとする。

「ねぇ？どうしたの？」

だが、その前に彼女が立ち塞がりそれを見せないようにしてくる。
「あ……ああ……ごめん……」
俺は謝ることしか出来ず、そう返した後に彼女に手を引かれて離れた……そういえば、俺は何か大切なモノを無くしてる気がする。
何を無くしたんだっけ？
……
「エイヤ!!!」
「フフフ……ハァ！」
「アアッ!?」
衛星軌道上にて二人の巨人、ウルトラマンコスモスエクリプスモードとカオスウルトラマンノイズが激闘を繰り広げていた。
「（はぁ……はぁ……くっ……）」
だが、戦闘力に差が出てるのかコスモスエクリプスの方が押されており余裕が無く、対してカオスウルトラマンノイズは圧倒的な力で余裕を持って圧倒していた。
「ティ!!!」
「ウォ!!!」
コスモスエクリプスは諦めずに攻撃を繰り出し反撃の手の内を探ろうとするがカオスウルトラマンノイズはそれを躱し蹴りを入れてかかと落としを繰り出し地面に叩きつける。
コスモスエクリプスはそのまま地面に叩きつけられると変身が解けてムサシに戻る。
「あっ……がっ……ああ!!」
「くどい!!!しつこいぞ！」
地上の方もフィーネが暴走状態の響を圧倒的な力を持って叩きのめしており、それでも諦めない響を前に首を締めて持ち上げた。
「あっ……がぁ……」
響は殴る蹴るをしてその拘束から逃れようと必死になるが、その一撃一撃はフィーネにまるで通用しておらずそのまま更に追い詰められていく。
「立花を離せ!!!ぐっ!?」

それを見た翼は静観をやめてそのまま攻撃に加わるが興味が無いのかすぐに一蹴されて地面を転がり気絶する。
「ウッウウウウウウウ!!!」
「これで終わりよ!!!」
フィーネは未だに対抗を続ける響を地面に叩きつけて黙らせる、その際に響の暴走状態は解け、更にシンフォギアも解除される。
「かっ……かずき……くん……」
それでも響は気絶せずにフィーネに立ち向かうおうと立ち上がるが身も心もボロボロであり立ってるのが精一杯だった。
「まぁいい、では……ガ・ディンギル起動!!!目標は月!!!」
それを見たフィーネはふっと笑うとそのままガ・ディンギルを起動して月を標準に捉える……その際、カオスウルトラマンノイズが地上に降りそのまま砲塔に入り、最深部で着地すると金属でできたパーツに身体を固定されそこからエネルギーを吸収され砲塔に集中する。
「これで終わりだ!そこで見ていろ!」
「……」
響は虚ろな瞳でそれを見ていると衛星軌道上で赤い光が見えた……光の位置は丁度ガ・ディンギルの真上であった。
「クリスちゃん?」
それを見た響はそう呟くと同時にガ・ディンギルから光が放たれた、その光は暴走してた響が放っていた光よりも黒く、そして強力であった。
「来るか……絶唱でも足りるか?」
発射される少し前、クリスはフィーネが響に気を取られてる隙を突いて月を守るべく衛星軌道上でエネルギーを貯めて構えていた。
「パパ、ママ……そしてムサシ、ごめんな……アタシは」
彼女は懺悔の言葉を吐いてい謝ってると黒い光がこちらに向かって来てることに気がついた、その威力は明らかにあの時よりも強力なのは肌でピリピリと感じていた。
「さよなら……」
クリスはそう呟くとある歌を歌う、それはシンフォギアの最後の力

……諸刃の剣、絶唱。
「Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａｌ　Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎはｆｉｎｅ　ｅｌ　ｂａｒａｌｚｉｚｚｌ　Ｇａｔｒａｎｄｉｓ　ｂａｂｅｌ　ｚｉｇｇｕｒａｔ　ｅｄｅｎａｌ　Ｅｍｕｓｔｏｌｒｏｎｚｅｎ　ｆｉｎｅ　ｅｌｚｉｚｚｌ」
　彼女は怯えながらもそれを決意ある歌声で奏でる、そしてそれを周囲に展開するビット、そしてガ・ディンギルに向けてるライフルに集中し軌道を変えるべく放つ、だが……カオスウルトラマンノイズとデュランダルの力は強大なのかそれを物ともせずに突き進む。
「（ダメか……ごめん……）」
　彼女はフルパワーで放つ攻撃をいとも簡単に押し返してる力を前にそう考えた直後だった。
「エイヤ!!!」
　その隣で聞き慣れた声が聞こえたからだ、クリスはそれに驚いて前を見るとそこには絶唱の放たれるエネルギーの光線を自身の力に変えゴールデンライトバリアを展開したコスモスエクリプスの姿があった。
「ムサシ、コスモス……なんで……」
「もう君を一人にはしたくないから……だから、気を抜かないでそのまま光線を放ち続けて」
　それを見たクリスはそう尋ねるとコスモスエクリプスはそうムサシの声で返す、それを聞いた彼女はうなづいて更にエネルギーを送るのだが、それでも軌道を逸らすのが精一杯だった。
　二人はそのまま押し負けて黒い光にそのまま呑まれるが光線は曲がり月の一部を打ち砕けるだけにとどめた。
「なん……だと……」
　それを見てフィーネは驚きの声を上げて驚く、デュランダル×ソロモンの杖×カオスウルトラマンという究極の方程式から生まれた方法が塞がれたからだ。
「だが、いい……もう一度撃てば……」

その時、ちりんと鈴の音が聞こえた……フィーネはその音を聞いた時、響の方を見つめる。
その手にはあるキーホルダーがあった、それはかつて響からカズキにプレゼントしたものであり、そして再び二人を巡り合わせるきっかけを作ったもの、〝ガンバルクイナくん〟だった。
「なんだ……それは……？」
「思い出したんだ、これを……ずっと、ずっとポケットの中で忘れてて そしてカズキくんと出会って思い出してそれをずっと渡しそびれてた」
「……何をする気だ、やめろ……それを見せるな!!!」
それを見たフィーネは黒い球体の中から強い光が漏れ出てるのを感じてそれを見せるなと声を上げる。
「カズキくんを返してもらう……」
その時、周りから歌声が聞こえる……それは希望に満ちた絶唱の光、彼女の陽だまりである友人、小日向未来が起こした彼女達への応援歌……私立リディアン音楽院の校歌である。
「歌……なぜ、まさか……」
その光はガンバルクイナくんに集まっていく、人々の絆を紡ぐ光が希望と未来を一つのキーホルダーに乗せていく。
「Ｃｒｏｉｔｚａｌ　ｒｏｎｚｅｌｌ　Ｇｕｎｇｎｉｒ　ｚｉｚｚｌ」
そして一つの歌が響く、そして二つの光の柱が飛び立ち……二人の人物が立ち上がる。
「なんだ……その力は……」
「シンフォギアだぁぁぁぁぁぁ!!!!!」
そして響はガングニールエクスドライブモードを発現すると同時に黒い球体に向けてガンバルクイナくんを投げる……その軌道は見事に命中し光が彼の元に繋いでいく。
……
「ごめん、俺はここにはいられない」
「急にどうしたの？」

ある時、俺は彼女に告げた……ここにはいられないと、それを聞いた彼女は首を傾げながらそう尋ねる。
「もう、夢は終わりだ……フィーネ」
「なっ……何を言って……」
彼女の動揺ぶりを見て俺は手に持つエボルトラスターを見せてこう告げる。
「お前が欲しいのはノアだ、俺じゃない……それといい夢を見せてくれてありがとう、さよなら」
そして俺は扉を開ける、そこは公園で過去の俺と彼女、響がいた。
「これあげる」
「これは？」
「がんばるくいなくん、これをみていつでもおもいだしてね」
「うん」
俺はその手にガンバルクイナくんを握ると光が俺の身体を包んでいく、もう迷いはない……俺はこの道を進む。
「絆、ネクサス……ウォオオオオオオオ!!!」
俺はエボルトラスターを引き抜くと光に包まれながら飛び出す、その姿はウルトラマンネクサスの真の姿を取り戻してはいなかったが、それでも人々の絆を紡ぎ、蘇った。
「ノアさま……」
ウルトラマンネクサス・ジュネッスG……人々の絆を結び、今……ここに顕現する。
ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ……